アーツカウンシルしずおか

アニュアルレポート 2022

ARTS COUNCIL SHIZUOKA ANNUAL REPORT 2022

アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート2022

アーツカウンシルしずおか

アニュアルレポート 2022

ARTS COUNCIL SHIZUOKA ANNUAL REPORT 2022

目次

05……ごあいさつ

06……2年間の取組で見えてきたこと

09……主な事業内容

10……**2022年度**
「文化芸術による地域振興プログラム」

11……**地域クリエイティブ支援**

12……松崎まちかど花飾り実行委員会

13……KURURA制作実行委員会

14……一般社団法人熱海怪獣映画祭

15……熱海未来音楽祭

16……PROJECT ATAMI 実行委員会

17……スケラボ（Scale Laboratory）

18……しゃぎりフェスティバル実行委員会

19……Cliff Edge Project

20……こころのまま

21……株式会社虎玄（東山旧岸邸）

22……ひかり市民センター事務局

23……一般社団法人トリナス

24……藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会

25……NPO法人クロスメディアしまだ

26……原泉アートプロジェクト

27……袋井市文化協会グループ

28……ダンスグループM・K

29……社会福祉法人ひかりの園 浜松市根洗学園

30……NPO法人クリエイティブサポートレッツ

31……**地域はじまり支援**

32……うさみみ

33……趣みん芸友の会

34……Lab Qrio（ラボキュリオ）

35……Lead wiz-art（リード・ウィズ・アート）

36……一般社団法人三保松原3ringsプロジェクト

37……NPO法人静岡あたらしい学校

38……Ce-on Music

39……NPO法人ESUNE

40……ふくろい幕の内弁当実行委員会

41……浜学連[はまがくれん]

42……赤ちゃんと人形のお店河田

43……SMS

44……キックオフミーティング

45……成果報告会
「おもしろい人に会いたい!!2023
ーしずおかアートプロジェクト見本市ー」

47……《蛸みこし》としずおかアートプロジェクト見本市

49……**主催事業**

50……マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）2022

54……クリエイティブ人材の派遣制度

55……アソシエイト、クリエイティブ人材副業調査

56……地域産業とクリエイティブ人材マッチングモデル事業

57……地域づくりフォーラム
「クリエイティビティと地域のイノベーション」

58……アートライティング講座「かきかたきかく」

59……超老芸術

60……相談窓口

61……広報資料

ごあいさつ

アーツカウンシルしずおか
アーツカウンシル長
（公益財団法人静岡県文化財団 副理事長）
加藤　種男 Kato Taneo

アーツカウンシルしずおかは、「すべての県民がつくり手（表現者）」となることを目指し、地域資源の活用や社会課題への対応を図る住民主体の取組“アートプロジェクト”を活性化させるため、助成制度「文化芸術による地域振興プログラム」を設け、社会の様々な分野に軸足を置くアートプロジェクトの担い手である“住民プロデューサー”の活動を支援しています。

今年度は、まちづくりや福祉、環境保全等に取り組む団体や、地元在住アーティストが率いる団体など、公募により採択された31の団体が、「子どもの主体性」「食」「花」「伝統」「怪獣」「本」「竹林」「商店街」「茶工場」「道の駅」「無人駅」など多様なキーワードを掲げ、県内各地でアートプロジェクトを展開されました。その成果は、3月12日にグランシップで開催した「おもしろい人に会いたい!!2023 ーしずおかアートプロジェクト見本市ー」でご報告をいただいたところです。

アーツカウンシルしずおかは、こうした住民主体の創造的な活動を応援する組織として、2021年1月に公益財団法人静岡県文化財団内に設置され、同年4月から本格稼働を開始し2年が経過しました。

初年度となる2021年度は、「文化芸術による地域振興プログラム」を事業の主軸に据えながらも、その他の事業については手探り状態にある中、「蒔かぬ種は生えぬ」の精神で、「ビジネス×アート」「まちづくり×アート」など様々な分野との協働を進めるための事業を考案、試行しました。

こうした試行の成果を踏まえ、2022年度は、企業経営者に登壇いただいた「地域づくりフォーラム」の開催など新たな事業や制度を立ち上げ、多様な分野で活動されている方々とお会いする中で、アートへの期待感を感じ取った1年となりました。

その間、全国各地の文化関係者の皆様にもご視察をいただき、「すべての県民がつくり手（表現者）」の実現に向けた事業展開について、お褒めの言葉をいただきましたことは大変励みになっております。
中でも、NHKで全国放送された「超老芸術」をはじめ、住民プロデューサーの発掘や将来的なアートプロジェクトの創出を期待する「マイクロ・アート・ワーケーション」は、県内外の皆様から大変評価をいただいており、今後もアーツカウンシルしずおかのシンボル的な事業として発展させていきたいと考えております。

ビジネスをはじめとする様々な分野との協働は、まだ始まったばかりですが、今後も地域社会とアートを結ぶ仕組みをつくり、その運用を通じて創造的な地域づくりに貢献してまいります。引き続きのお力添えをお願い申し上げます。

2 年間の取組で見えてきたこと

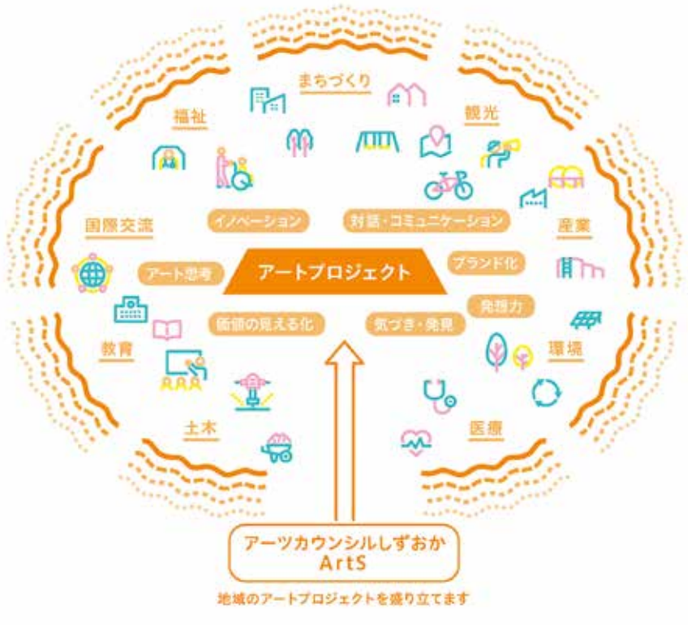
アーツカウンシルしずおか（以下、「ArtS」という。）が、2021年1月に公益財団法人静岡県文化財団の一部門として設置され、同年4月から本格稼働して2年が経過した。

“すべての県民がつくり手（表現者）”となることを目指して、誰もが有する創造力が活かされる道をひらき、社会の様々な分野でイノベーションが生まれる創造的な地域づくりに貢献する組織として、主にアートの「社会的価値」に着目し、アートの力が様々な分野の取組の「媒介」として活かされるよう事業を展開している。

ArtSの事業の柱は、まちづくりや観光、国際交流、福祉、教育及び産業など社会の様々な分野において、地域資源の活用や社会課題に対応し実施される住民主体の創造的な取組“アートプロジェクト”を県内各地で活性化させることである。

具体的には、助成制度『文化芸術による地域振興プログラム』を設け、アートプロジェクトの担い手である“住民プロデューサー”の活動をArtSのプログラム・ディレクター、コーディネーターの5人が伴走支援している。

こうしたアートプロジェクトを静岡県内全域、かつ社会の様々な分野で活性化させるためには、住民プロデューサーの候補となる人々を県内各地で発掘し、実施を後押するような取組が必要であるが、ArtS単独では時間的にも人員的にも限りがあるため、以下のようなキーパーソンや団体との接点をつくり、その力を借りようと考えた。



地域づくりのキーパーソン

住民プロデューサーの候補者を発掘するため、まちづくりや移住支援等で活躍し、若者や課題解決意欲の高い人々を惹きつけている地域づくりのキーパーソンに着目した。こうした人達にアートの社会的・経済的価値を実感してもらうことでキーパーソン本人はもとより、周りに集う人々が将来的に住民プロデューサーとして活躍してくれることを期待している。

クリエイティブ人材

アートプロジェクトを活性化させるためには、必ずしもアートの専門性がない住民プロデューサーの活動を支え、協働するアーティスト等の存在が重要である。この協働は、みんなでつくって、みんなで楽しむ祭りのように、「つくり手と受け手の流動化」を目指すものであり、ArtSの事業では、地域住民など「関わる人々の創造性を引き出す、アーティスト、アートディレクター、アートマネージャー、キュレーター等」を『クリエイティブ人材』と定義している。

これまでのArtSの事業を通じ、クリエイティブ人材の洞察力、リサーチ力、本音を引き出す力、言語表現力等の高さを改めて認識する結果となった。

こうした人材が地域社会で暮らし、日常的に住民と交流する環境が生まれることにより、住民の創造性が触発され、若者を惹きつけるなど、地域の魅力向上につながることが期待される。

企業

将来の予測が困難なVUCAと呼ばれる時代にあって、アーティストが作品を生み出す際の考え方や思考プロセスとされる『アート思考』をイノベーションの創出や社員教育のために導入する企業が増えるなど、ビジネス分野におけるクリエイティブ人材の活動領域の拡大が期待される。

また、企業が近隣住民との関係づくり等を目的に、クリエイティブ人材との協働が進むことにより、地域経済が活性化し、そこで実感したアートの社会的・経済的価値が企業側から発信されることで、アートとビジネス分野との連携が加速すると考えている。

自治体

「アートを媒介としたコミュニティづくり」であり、様々な分野の課題に対応するアートプロジェクトを活性化させるためには、自治体のすべての部署との連携が必要である。このため、ArtSの事業の情報を、市町の文化担当課はもとより企画担当課、観光・交流担当課等にも随時報告しているほか、自治体職員も対象に先進事例視察等を行っている。

また、県・市町等で構成される移住推進組織にも加入していることから、ArtSが行うクリエイティブ人材意向調査等の結果を共有し、施策への反映等を提案していく予定である。

将来的には、自治体のまちづくり会議や総合計画審議会等へクリエイティブ人材が委員として参画する等、人々の創造性を引き出すアートの力が、様々な分野で活かされるよう一層の連携を図っていく。

上記のキーパーソンや団体との接点づくりも念頭に置き、この2年間にArtSが実施した主な事業は以下のとおりである。

主な事業

ねらい		主な事業
地域コミュニティの活性化	アートを媒介としたコミュニティづくり	①
	住民とクリエイティブ人材との出会いづくり	②
イノベーション創出への寄与	様々な現場でアートの力の活用を提案しやすい雰囲気づくり	③④⑤
関係人口の創出、移住の促進	住民とクリエイティブ人材が日常的に交流できる環境づくり	②⑥

①文化芸術による地域振興プログラム（2021年度～）

P10～P48

アートプロジェクトの担い手である“住民プロデューサー”の活動に対し、助成を行うとともに、プログラム・ディレクター、コーディネーターが伴走支援する『文化芸術による地域振興プログラム』を運用し、アートプロジェクトの活性化を図っている。

2021、2022年度の2年間で19市町、延べ53団体の支援を行い、特に福祉やまちづくりなどの分野で、全国的にも注目を集めるアートプロジェクトが展開されている。

②マイクロ・アート・ワーケーション（2021年度～）

P50～P53

地域団体が『ホスト』となり、『旅人』としてワーケーションを行うクリエイティブ人材と、地域住民との交流をコーディネートする『マイクロ・アート・ワーケーション（以下、「MAW」という。）』は、様々な事業アイデアを検討する中で、主に住民プロデューサーを発掘する仕掛けとして考案したものである。

ホストの役割は移住支援等に取り組む地域づくりのキーパーソンの活動をヒントにしており、これまでにホストを務めた計24団体の活動分野は、「まちづくり（移住促進、空き家利活用等）」14団体、「交流・体験」5団体、「文化・芸術」3団体、「農山漁村」2団体であった。

旅人であるクリエイティブ人材に対しては、住民との交流とweb上での滞在レポートの発信を条件としているが、創作物の制作等は求めていない。

MAWの企画段階で期待した効果は以下のとおりである。

ア.旅人が地域の魅力を発信することにより、住民が地域の魅力を再認識し、誇りが醸成される。
イ.ホストや住民の中から、将来のアートプロジェクトの担い手が生まれる。
ウ.旅人として地域と関わることを通じ、クリエイティブ人材の活動領域が拡大し、関係人口の創出や移住につながる。

アについては、「滞在体験を言語化してもらうことで、事業に磨きをかけることができた」「街に対する新たな視座を与えられた」などのホストの言葉に代表されるように、クリエイティブ人材の洞察力、言語表現力により、住民が地域の見方を変える契機となるといった効果が確認された。

イについては、事後アンケートで約9割のホストが、「活動にアートの視点を取り入れたり、新たな取組を立ち上げたりしたい」と回答し、2022、2023年度の助成制度に計9団体から応募があるなどの予想以上の早い段階で効果が確認された。

ウについては、MAW終了後も複数のホストがクリエイティブ人材との交流を継続しているなど、ホストの活動拠点が、関係人口の創出につながる交流拠点となる可能性を感じている。

③地域経済活性化モデル形成のためのパイロット事業（2021年度）

地域経済の活性化を目指す企業が主導し、「空き家の利活用」や「農園を核としたまちづくり」をテーマに意見交換やワークショップを行うなど、企業と地域住民、クリエイティブ人材の三者の協働を試みた事業である。

クリエイティブ人材の参画により、同じ話をしていても各々の頭の中のイメージが異なることが可視化されたり、参加者から新たな視点が引き出されたりするなど、企業関係者にアートの力を活用するメリットを実感してもらうことができた。

一方、クリエイティブ人材の豊かな発想を活かすには、ビジネス側・アート側それぞれのロジックを理解する通訳が必要であることが明らかとなるなど、ArtSが事業を推進する上で有意義な知見を得た。

④地域づくりフォーラム（2022年度～）

P57

事業③の成果を踏まえ、「地域に目を向け、共創を通じて住民のクリエイティビティを引き出している企業は、地域社会にイノベーションを起こす牽引役である」とのコンセプトを提示し、『企業のクリエイティビティと地域のイノベーション』と題した地域づくりフォーラムを実施した。

事業③に参画した企業経営者が登壇し、アートへの期待感が表明されたことで、フォーラム終了後、企業関係者からの問合せや相談が増え、新たな連携が生まれている。

⑤クリエイティブ人材の派遣制度（2022年度～）

P54

事業③の実績等を踏まえ、様々な企業や自治体等の現場で、「アートの力の活用」を提案し、導入しやすくなるよう『クリエイティブ人材派遣制度』を設けた。

異なる領域をつなぎ、思いもよらない発想を生み出すアートの創造性は、複雑化した地域課題に対応する自治体の政策形成や、ビジネス分野における顧客との関係づくり、スタッフマネジメントなどにも寄与する。一方で、そうしたアートの創造性に期待を抱きつつも、実際の導入に当たっては、組織内でのイメージの共有が困難であり、合意形成が難しい等の理由で、実現しないケースが多いと考えられる。

このため、派遣制度を設け、ArtSが調整役を担うことにより、導入に当たってのハードルを下げ、様々な現場でのアートの力の活用を促進することとしている。

⑥クリエイティブ人材マッチングモデル事業、副業調査（2022年度）

P55～56

アートプロジェクトを活性化させるためには、クリエイティブ人材の存在が重要であるが、こうした人材の約３割は東京都に集中している（H27国勢調査）。

一方で、MAWに参加したクリエイティブ人材の２割以上が、静岡県内で活動する場合に「副業の紹介」を求めていることが明らかとなったため、クリエイティブ人材の本業を活かしたビジネス分野とのマッチングや、アート思考を活かした副業等の調査を行い、自治体の移住や関係人口創出施策への反映を目指している。

上記の事業に加え、分野によって異なる言語や考え方の違いなどを理解し、新たな制度づくり等を検討する必要があるため、各分野で活躍する人々とArtSのスタッフが気軽に意見交換できるよう『アソシエイト』制度を設けた。現在は、主にビジネス分野との連携を進めるため、起業家等11人に委嘱している。

MAWのホストも務めたアソシエイトの一人は、「わからないでしょ？というアートの排他的なところが嫌だったが、ホストとして1週間ほどアーティストと話をするうちに、アーティストも分かっていないということが分かったことが大きかった」と語り、現在は住民プロデューサーとして、アートプロジェクトをスタートさせている。

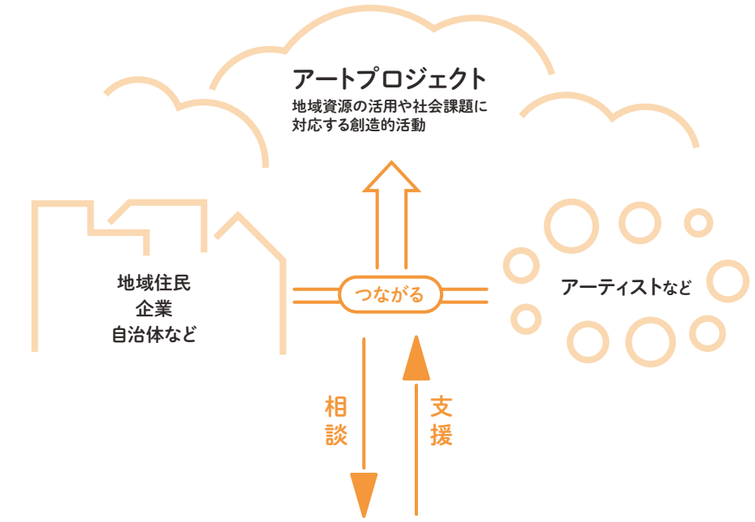
潜在的にアートの創造性に期待しつつも、「難しそう」と敬遠したり、「こんなことをお願いして良いものか」と迷ったり、そもそも「誰にお願いしたら良いかわからない」というケースが多いと思われるが、こうした垣根を取り払うとともに、アートを媒介役として、様々な分野の立場の異なる人々をつなぐ役割をArtSが担うことで、新たなうねりを起こし、地域社会とアートが相互利益をもたらす関係づくりに寄与したいと考えている。

ArtSの取組を概観すると、「すべての県民がつくり手（表現者）」の実現に向け次のような道筋を描きながら進めており、設置から２年が経過した現在地は「アートの社会的価値への期待感醸成」に関し、少しずつ成果が見え始めた段階ではないだろうか。

様々な分野とアートとの交流促進
↓
アートの社会的価値への期待感醸成
↓
クリエイティブ人材の活動領域拡大
↓
クリエイティブ人材の移住
↓
アートプロジェクト活性化
↓
すべての県民がつくり手（表現者）
地域社会の活性化（イノベーションの創出）

無論、「すべての県民がつくり手（表現者）」は、この道筋だけで実現できる訳ではなく、引き続き、多くの人々との関わり合いの中から新たな手法を見出し、改善を図りながら取組を進めていく。

主な事業内容



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

住民主体のアートプロジェクト支援

●助成、伴走支援
▷文化芸術による地域振興プログラム …p10～48
●住民プロデューサーの発掘
▷マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）…p50～53
●先導的な事業の試行
▷地域産業とクリエイティブ人材マッチングモデル事業 …p56
●講座の開催
▷アートライティング講座「かきかたきかく」…p58

コーディネート

●アーティストとのマッチング
▷クリエイティブ人材の派遣制度 …p54
▷地域産業とクリエイティブ人材マッチングモデル事業（再掲）
▷マイクロ・アート・ワーケーション（再掲）
●企業・団体・大学・自治体とのネットワークづくり
▷アソシエイト …p55
●セミナー、講演会などの開催
▷地域づくりフォーラム「クリエイティビティと地域のイノベーション」…p57
●相談窓口 …p60

調査研究・政策提言

●地域資源・文化活動の調査研究
▷クリエイティブ人材副業調査 …p55
▷超老芸術 …p59
●自治体、文化団体などへの助言・提言

2022年度
文化芸術による地域振興プログラム

地域資源の活用や社会課題への対応を目指す先駆的な取組（アートプロジェクト）を県内団体等から公募。
本年度は2つの区分により支援を行い、計31件のプロジェクトが各地で展開された。

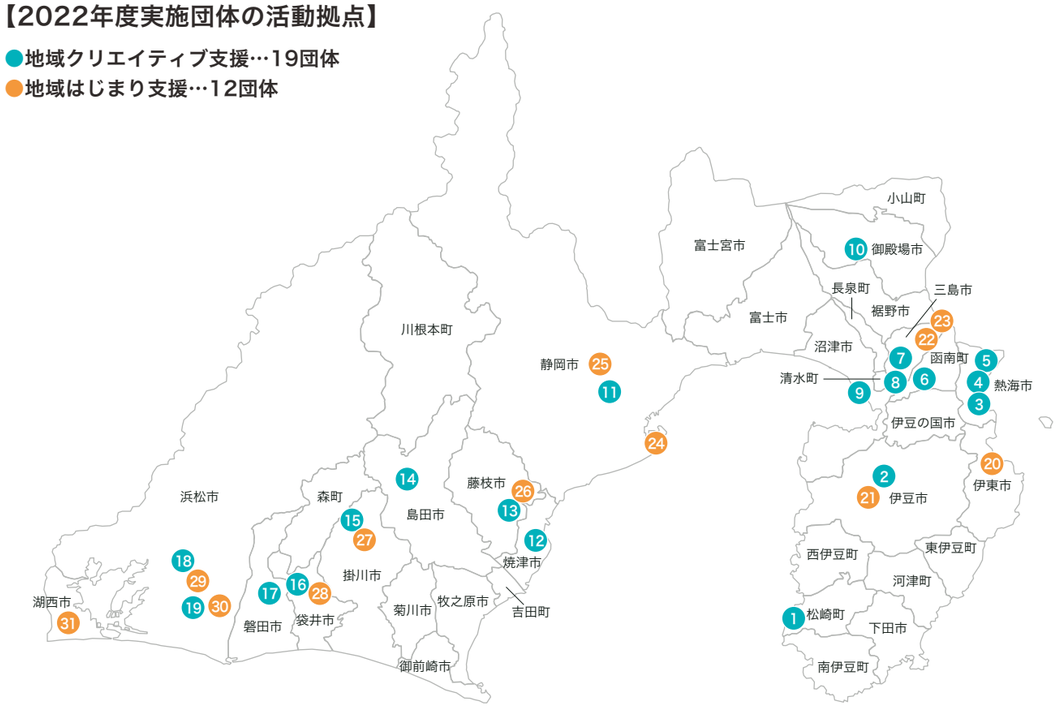
地域クリエイティブ支援
（助成金額上限：500万円）
他地域や当該分野のモデルとなる先駆的な
アートプロジェクト

地域はじまり支援
（助成金額上限：30万円）
アートプロジェクトの実施に向けた
試行的な取組

※採択された事業については、経費の一部を助成するだけでなく、事業を進めるに当たっての助言や、
団体等のニーズに合わせた伴走支援を、プログラム・ディレクターやプログラム・コーディネーターが行った。

【2022年度実施団体の活動拠点】

●地域クリエイティブ支援…19団体
●地域はじまり支援…12団体



1. 松崎まちかど花飾り実行委員会
2. KURURA制作実行委員会
3. 一般社団法人熱海怪獣映画祭
4. 熱海未来音楽祭
5. PROJECT ATAMI 実行委員会
6. スケラボ（Scale Laboratory）
7. しゃぎりフェスティバル実行委員会
8. Cliff Edge Project
9. こころのまま
10. 株式会社虎玄（東山旧岸邸）
11. ひかり市民センター事務局
12. 一般社団法人トリナス
13. 藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会
14. NPO法人クロスメディアしまだ
15. 原泉アートプロジェクト
16. 袋井市文化協会グループ
17. ダンスグループM・K
18. 社会福祉法人ひかりの園 浜松市根洗学園
19. NPO法人クリエイティブサポートレッツ
20. うさみみ
21. 趣みん芸 友の会
22. Lab Qrio（ラボキュリオ）
23. Lead wiz-art（リード・ウィズ・アート）
24. 一般社団法人三保松原3ringsプロジェクト
25. NPO法人静岡あたらしい学校
26. Ce-on Music
27. NPO法人ESUNE
28. ふくろい幕の内弁当実行委員会
29. 浜学連 [はまがくれん]
30. 赤ちゃんと人形のお店河田
31. SMS

文化芸術による地域振興プログラム
地域クリエイティブ支援

**他地域や当該分野のモデルとなる先駆的なアートプロジェクトが対象。
地域住民を巻き込みながら作りあげる芸術祭や、
子どもたちによる地域情報誌づくりを全国へ波及させようとする取組、
共生社会の在り方を提案する福祉施設の事業など、
しなやかな発想で社会の様々な分野に新しい風を起こす 19 のプログラムが実施された。**

団体名	プログラム名称	所在地
松崎まちかど花飾り実行委員会	松崎まちかど花飾り	松崎町
KURURA制作実行委員会	静岡発祥の「子どもローカルマガジンプロジェクトCOLOMAGA」を全国に！	伊豆市
一般社団法人熱海怪獣映画祭	第５回熱海怪獣映画祭	熱海市
熱海未来音楽祭	第４回熱海未来音楽祭	熱海市
PROJECT ATAMI 実行委員会	PROJECT ATAMI：「アート思考による地域課題の解決」をめざした研修・フィールドワーク	熱海市
スケラボ（Scale Laboratory）	とけあう境界　〇〇×パフォーミングアーツ	函南町
しゃぎりフェスティバル実行委員会	地域コミュニティ活性化に向けた伝統芸能活用プロジェクト	三島市
Cliff Edge Project	Cliff Edge Project　うぶすなの水文学リサーチプログラム	三島市
こころのまま	心のままアートプロジェクト	沼津市
株式会社虎玄（東山旧岸邸）	御殿場文化発信プロジェクト 文化継承〜芸能と食文化〜	御殿場市
ひかり市民センター事務局	竹林劇場プロジェクト〜タテにのびるダンス〜	静岡市
一般社団法人トリナス	ブックフェスタしずおか	焼津市
藤枝宿世代をつなぐ商店街づくり実行委員会	藤枝ノ演劇祭２	藤枝市
NPO法人クロスメディアしまだ	UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2023	島田市
原泉アートプロジェクト	原泉におけるアーティスト・イン・レジデンスの取り組みとその実践による地域振興事業	掛川市
袋井市文化協会グループ	月見の里学遊館開館20周年記念 市民音楽劇プロジェクト	袋井市
ダンスグループM・K	SHIZUOKA舞伝プロジェクト	磐田市
社会福祉法人ひかりの園 浜松市根洗学園	アーティストと福祉と地域 〜見えないものを見るためのプロジェクト〜	浜松市
NPO法人クリエイティブサポートレッツ	「表現未満、」プロジェクト 〜街を舞台に実装する！〜	浜松市

静岡県東部→中部→西部の順に掲載

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

松崎まちかど花飾り実行委員会（松崎町）

松崎まちかど花飾り

実施日（期間）2022年10/15～11/13
※まち灯り（同時開催）10/29～11/6

実施場所 松崎町 中宿通り、なまこ壁通り周辺、長八美術館、民芸館、明治商家中瀬邸、伊豆文邸、浜丁

まちのロマンを アートが照らす

昭和53年から「花とロマンの里」をテーマに、豊かな自然や歴史、文化など地域の特性を活かした町づくりを進めてきた松崎町。「まちかど花飾り」は、そんな松崎町において、なまこ壁の街並みを舞台に、古民具を使った寄せ植えなどを飾る等、町民とアーティストが協働した企画。コロナ禍で元気をなくした町を「花」で再び活性化させることを目指して令和3年度にスタートした。

2回目となる今年度は、藤枝市在住のアーティスト持塚三樹（もちづかみき）氏が加わり、町民とともに地域資源の発掘や共創に取り組みながら、なまこ壁を照らすプロジェクションマッピングによって、地域内外の人々が夜の松崎町を楽しむことができる企画へと発展した。

持塚さんと町内の小学生92人が協働して制作したプロジェクションマッピング

～担当コーディネーターの視点～

マイクロ・アート・ワーケーション（p50～53）でアーティストを受け入れた経験から、町民とアーティストが協働することにより、既存の地域活動に新たな視点が加わることを目指した企画が立ち上がった。

誰もが親しみやすい「花」をテーマに据えることで、町民の営みを丸ごと表現活動にしていこうとする等、松崎町という地域の寛容さがうかがえる。だからこそ、美しく飾られた花々はもとより、野に咲いた花をポンと玄関先に飾っておくなど、もっと素朴でささやかな行為すらも「まちかどの花飾り」として見せていくような工夫を期待したい。それこそが「すべての町民がつくり手」となる県内でも稀に見るアートプロジェクトとなっていくはずだ。（立石沙織）

地域の山や畑で採れた蔦や藁をつかって、町民が制作した作品がまちなかに飾られる（右は持塚さん）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

KURURA制作実行委員会（伊豆市）

静岡発祥の「子どもローカルマガジンプロジェクトCOLOMAGA」を全国に！

実施日（期間）①KURURA vol.10取材～制作、プロによるレクチャー 2022年4～12月
②コロマガ・サミットvol.2　11/12

実施場所 ①伊豆市内
②ラフォーレ修善寺

子ども編集部による編集会議

故郷を自慢できる子どもを増やしたい！

「KURURA（くるら）」は、伊豆地域の小・中学生がプロのクリエイターから編集・デザイン等のエッセンスを学びながら、自分たちの暮らすまちを記者として取材し、原稿を作成、約半年かけて完成させていく地域情報誌。KURURA制作実行委員会は、2013年の活動開始以来、取材や制作の体験を通して、子どもたちが地元への理解と愛着を深めるきっかけを作ってきた。現在、同様の活動が「子どもローカルマガジンプロジェクトCOLOMAGA」として全国16地域（準備中含む）で展開中。今年度は他地域への更なる波及を目指し、ホームページの開設や、プロジェクト加盟地域が一同に会するコロマガ・サミットの開催などに取り組んだ。

紙漉き体験

～担当コーディネーターの視点～

伊豆市で始まった子どもローカルマガジンのプロジェクトは、今や全国16地域（準備中含む）に広がっている。この背景にあるのは、若者の地元離れという全国共通の悩みだ。子どもがまちのスポットを取材し記事にする本事業の真髄は、まちの魅力を語る大人との出会いにある。現在、運営の一部を、中高生による「子ども編集部」、大学生による「コネクトチーム」が担っており、彼ら彼女らは子ども記者を卒業しても本事業に関わり続けたいと希望したメンバーだ。彼らの溢れる地元愛は、多くの取材先や大人との出会いを通じて醸成されたものであり、第10号を発刊したKURURAの財産である。（若菜ひとみ）

完成した「KURURA vol.10」を手にして

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

一般社団法人熱海怪獣映画祭（熱海市）

第５回熱海怪獣映画祭

実施日（期間）①熱海怪獣映画祭・熱海怪獣ひろば
2022年10/22、23
②怪獣になっちゃうワークショップ
2023年1/21

実施場所①熱海芸妓見番、熱海親水公園
②熱海市立第一小学校

熱海芸妓見番でのトークショー

怪獣とつくる 新しい熱海

さまざまな怪獣映画の舞台となり、怪獣と縁が深いまち・熱海において、2018年に熱海市民の有志が集まり、「熱海を怪獣の聖地に」をキャッチフレーズに始まった「熱海怪獣映画祭」。年々、地域住民をはじめとしたリピーターを増やしている。
5年目となる今回は、伊豆や小田原など熱海周辺のロケ地が登場する怪獣映画の上映や、怪獣映画制作のクリエイターらによるトークセッションのほか、初めての屋外イベント「熱海怪獣ひろば」を実施。映画祭に先駆けた「新怪獣お絵かきコンクール」や、地元飲食店とのコラボメニュー企画も好評を博し、怪獣ファンのみならず熱海市民や観光客も楽しむことができる映画祭となった。

「熱海怪獣ひろば」

～担当コーディネーターの視点～

「怪獣」を熱海の新しい観光資源として活用すること、そして「映画」を軸に未来のクリエイターが集積する地域にすること。これら2つの目的が両輪で支え合うのが本映画祭の特徴である。新たな運営体制で迎えた今年度は、花街文化を残す芸妓見番での上映会、海に面した公園での屋外イベント、駅やスーパーマーケットとの連携企画、こども向けワークショップなど、地域への浸透に力を注いだ1年だった。これらにはすべて、熱海市民や事業者に向けて「『怪獣』で一緒に盛り上がろう！」という思いが込められている。熱海怪獣映画祭は、参加者の主体性を「怪獣」で引き出していくユニークな事業なのである。（立石沙織）

「怪獣になっちゃうワークショップ」

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

熱海未来音楽祭（熱海市）

第４回熱海未来音楽祭

実施日（期間）2022年9/10、11、23、24、25、10/15

実施場所起雲閣音楽サロン、熱海銀座EOMO store、
熱海サンビーチ、熱海の街角、店舗や空きビルなど

撮影：木村雅章

熱海の未来を作る音楽祭

熱海市生まれ・在住の音楽家、巻上公一がプロデュースする「熱海未来音楽祭」。日本を代表する歴史ある温泉観光地、熱海で開催されるこの音楽祭では、表現の「今、ここ」を求め、世界的に活躍するアーティストが集い、即興を中心としたパフォーマンスを通して、その場でしか生まれない音楽を熱海の風景と共に作り上げ、それらが地域住民や熱海を訪れる人々と共有される。
４年目となる今回は、街頭や海岸、商店街、洋品店からレストランまで街そのものを「劇場」と捉えて、市街を移動しながら人々とアーティストが出会い、交じり合い、熱海の面白さを共に発見していくような仕掛けが取り入れられた。

撮影：木村雅章

～担当ディレクターの視点～

『平和と隣のアーティスト』。
4年目となる音楽祭は、新たな印象を与えた。隣人、隣席、隣家、隣町は知っているけど、海を越えた隣国は遠い。隣国のまたまた隣国のトゥバ共和国から、伝統音楽グループが争いを乗り越えてやってきた。見守るのは隣人同士の私たち。敵も味方もない隣人。歌謡曲を歌い上げる熱海の音楽家。年に一度の大家族の集まりで歌う叔父さんみたい。見届けるのは、家族ではないけれどアットホームな隣人同士の私たち。束の間の隣人たちが築いたのは、平和でしかない疑似家族。隣人を愛せよ、と音楽が聞こえてきた。
（北本麻理）

撮影：木村雅章

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

PROJECT ATAMI実行委員会（熱海市）

「アート思考による地域課題の解決」をめざした研修・フィールドワーク

実施日（期間）
①研修＆フィールドワーク　2022年11/6
②ラウンドミーティング　12/19

実施場所
①熱海市内各所（HOTEL ACAO、薬膳喫茶 gekiyaku、Atelier&Hostelナギサウラ他）
②cafebar&guesthouse ennova

Photo by kabo

熱海がアートでアツイ

「PROJECT ATAMI」は、熱海の魅力をアートによって掘り起こし目に見える形にすることで、多くの人が、熱海という街を体感し楽しめることをめざして、2021 年度からスタートしたプロジェクト。“ これからの熱海 ” をより面白く、よりクリエイティブにしていく方法を模索している。
今年度は、アート思考を用いた地域課題解決のための新たなアイデアの創出をめざし、地域住民とともに「アートと街の関わり」について議論するラウンドミーティングや、地元企業及び熱海でワーケーションを行う都内近郊企業等を対象とした研修・フィールドワークを実施した。

～担当ディレクターの視点～

物事に対して答えを出すのではなく、問いを立てていくための思考法である「アート思考」を主題とした研修とフィールドワークでは、熱海の地元企業からの参加はなかったものの、県内外から12名の参加者が集った。特に、熱海にアトリエを構える西野達さんが案内する街歩きでは、アーティストが作品制作へ向かう過程において、様々なアイデアの種をいかに宙ぶらりんのままで留保しておくかという、いわゆる「ネガティブ・ケイパビリティ」の能力を参加者は追体験することができたのではないだろうか。
さらに、戸井田雄さんや近藤尚さんを始め、熱海で活躍するプレイヤーとの協力体制を築くなど、熱海のアートを牽引する存在として今後も期待したい。　（櫛野展正）

Photo by kabo

Photo by kabo

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

スケラボ（Scale Laboratory）
（函南町／2022年度活動拠点：長泉町・沼津市）

とけあう境界 〇〇×パフォーミングアーツ

実施日（期間）
①ヴァンジ彫刻庭園美術館開館20周年記念展 オープニングセレモニーにおけるライブパフォーマンス　2022年4/23
②ベルナール・ビュフェ美術館×スケラボ「彷徨う絵画たち」　8/26～28
③知覚の旅人ワークショップ　2023年1/22

実施場所
①ヴァンジ彫刻庭園美術館（クレマチスの丘）
②ベルナール・ビュフェ美術館（クレマチスの丘）
③沼津ラクーン

どこにでも「舞台を仕立てる」表現の実験室

県東部を拠点に「ひとりでも多くの人が、生活と地続きに無理なく芸術を楽しめるローカル」を目指し、役目を終えた施設や、使われていない場所、上演を行うための場所ではないところなどに一時的に活動の場（＝舞台）を作り上げ、様々な芸術に関わる企画を展開している団体。
今年度は長泉町の美術館複合施設「クレマチスの丘」と協働し、さまざまな知覚を刺激する鑑賞体験の場を創出。美術館に展示された絵画から飛び出してきたようなパフォーマーが、鑑賞者と一緒に展覧会を回る参加型の公演を開催したり、音声を用いたパフォーミングアーツ鑑賞プログラムの開発に取り組んだりした。

～担当ディレクターの視点～

美術館を舞台にした公演では、一連のパフォーマンスの中に、観客が参加できるような「余白」を盛り込んだことで、鑑賞者を巻き込んだ公演を展開することができた。特に、ビュフェ美術館では学芸員も解説役として演者に回ることで、普段であれば見過ごしてしまいそうな作品の細部にまで観客は注意を向けることができ、閉館後の美術館の活用方法のモデルとなることが期待される。
また、視覚に障害がある人がモニターとして参加した音声ガイド制作のためのワークショップ「知覚の旅人」では、障害のある人が優位という通常とは立場が異なる環境をつくり出し、物事には多様な見方があること理解する場としても機能した。　（櫛野展正）

ベルナール・ビュフェ美術館×スケラボ「彷徨う絵画たち」

ワークショップ「知覚の旅人」

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

しゃぎりフェスティバル実行委員会（三島市）

地域コミュニティ活性化に向けた伝統芸能活用プロジェクト

実施日（期間）
①伝統芸能×移住促進 しゃぎり見学・体験ツアー 2022年6/7
②「しゃぎりフェスティバル2022」 9/4

実施場所
①浅間芝岡神社
②三島市民文化会館（ゆうゆうホール）大ホール

220年続く爆音

江戸時代に、当時の東海道三島宿で東西の文化が入り混じり出来上がったともされる三島の祭り囃子「しゃぎり」を永続的に発展させるため、三島市各町内のしゃぎり保存会が会員となり、①周囲への理解 ②自己研鑽 ③後継者育成 の三要素を柱とした事業を行う団体。祭りのBGMとなっている「しゃぎり」をあえて祭り本体から切り離し、摺り鉦の大編成による演奏でその魅力を多角的に伝えるべく、毎年「しゃぎりフェスティバル」を開催し、現代における伝統芸能の新たな継承の形を模索している。

さらに今年度は、三島市移住アンバサダーと連携し、三島への移住者や移住検討者を対象に、しゃぎりの練習風景の見学＆体験ツアーを実施した。

移住者向けツアーで演奏を披露

～担当ディレクターの視点～

しゃぎりの魅力再発見や普及などの目的に紐づけ、新規の要素が毎回加わるしゃぎりフェスティバルは今年で6回目となった。今回は移住者との関わりに焦点を絞り、新たな住民層の祭りへの関わりを探った。市内の移住アンバサダーと企画した移住者向けツアーや、フェスティバルでの共演などを通じて、移住者の声を収集した。また、静岡文化芸術大学の奥中康人教授と重ねた意見交換では、伝統芸能継承を現代生活のあり方や人口の推移等に照らし合わせた整理が進み、今後の活動方針を見出した。

この活動の特徴は、自由度が守られた発展基盤を持っていること、そして担い手自身が客観的な分析をする視点を持っていることだと言える。それは伝統芸能継承の分野においては稀少であると考えられるため、うまく生かし、業界内はじめ、地域での存在感が高まることを期待している。

（鈴木一郎太）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

Cliff Edge Project（三島市／2022年度活動拠点：伊豆市）

Cliff Edge Project うぶすなの水文学 リサーチプログラム

実施日（期間）
アーティストによるリサーチ ２０２２年４月～２０２３年３月　※関連企画:貴僧坊水神社祭礼での雅楽演奏 10/14

実施場所
伊豆市貴僧坊地区（※関連企画:貴僧坊水神社）

わさび沢で水の音をサンプリングする三島市在住アーティスト・永冶晃子さん

伊豆の源流にアーティストが挑む

伊豆半島の特色ある地形・地質等の自然資源の再発見と災害史のアップデートをテーマに、美術・音楽・舞踊を用いたアートプロジェクトを開催し、地域の歴史や地理の理解と文化振興を図る団体。

2022～23年度は、伊豆半島中央部天城山麓大見川上流にある伊豆市貴僧坊地区を中心にプロジェクトを展開。水資源が豊かなこの地区で、ミヅハノメや塞の神など水にまつわる神々と、水の循環を科学する水文学をテーマに、今年度は、７組のアーティストが地域住民と交流しつつ現地リサーチを遂行するほか、地域講師らによるレクチャー等を行った。来年度はこれらを基にした作品制作と美術展の開催を予定している。

中伊豆中学校での雅楽演奏

～担当ディレクターの視点～

作家性。作家に人間性の性をつけたこの言葉は、創作する人の人間らしさを示す。人間を中心軸として、“人間らしさ”や“人間性”などを作品に投射させるのが芸術であれば、自然を前にしたとき果たして人間は中心となるのであろうか、と考えさせられるのがこのCliff Edge Projectである。わさび農家から地形とわさびの関係を学ぶこともあれば、地形の歪みを確認し噴火から生まれた黒曜石のかけらを見つけて歩くこともあるアーティストの姿は、中心軸から人間をずらして自然と対峙するトレーニングを行っているようであった。

（北本麻理）

日本画家・漆原夏樹さんの制作風景

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

こころのまま（沼津市）

心のまま アートプロジェクト

実施日（期間）
①絵画制作イベント
2022年7/24、8/8、9/10、25、11/3
②講演会『チャリティーではなくチャンスを！ 障害者雇用を考える』 10/2

実施場所
①②プラサヴェルデ（コンベンションぬまづ）
※①9/25のみサンウェルぬまづ

色とりどりの障害者芸術

障害のある子どもの母親たちを中心とした団体『こころのまま』は、「アートを通じて地域とつながる・地域をつなげる」を合言葉に、誰もが社会参加しやすい環境づくりに取り組んでいる。
今年度は障害のある子どもたちを対象に、美術家・中津川浩章氏の監修による、個々の表現を尊重した絵画制作イベントを複数回実施。近隣高校の生徒らにサポーターとして関わってもらうことで、創作活動継続のための人材育成や、環境整備に繋げた。さらに完成した作品の協賛企業への巡回展示や、障害者雇用に関する講演会の開催を通して、障害のある人たちと企業との接点を深め、彼らの社会的自立について考える機会とした。

～担当ディレクターの視点～

中心事業では、異なる学校の高校生同士が同年代の障害のある人たちと関わりながら絵画制作のサポートを行ったが、高校生が障害のある人の表現に主体的に関わるという点では全国においても類を見ない事業となっている。回を重ねるごとに企業や団体メンバー以外の障害のある参加者も増え、終了後のフィールドバックの時間には、皆で感想を述べ合うなど、「障害」に関する貴重な学びの場としても機能した。さらに、日本財団の竹村利道さんを招聘した障害者雇用の講演会を機に、任意団体から法人格を取得するなど、団体としても大きな発展を遂げた1年となった。
（櫛野展正）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

株式会社虎玄（東山旧岸邸）（御殿場市）

御殿場文化発信プロジェクト 文化継承 ～芸能と食文化～

実施日（期間）
①11月のイベントに向けた企画会議合宿
2022年7/23～25
②御殿場文化発信プロジェクト イベント 11月

実施場所
①YMCA東山荘　②東山旧岸邸
※新型コロナウイルス感染予防の観点から、実施団体判断のもと①②ともに中止とした

本プロジェクトの拠点「東山旧岸邸」

学生も社会人もみんな一緒に考える 御殿場の新しい「おもてなし」

「文化的建築物の保存及び公開を通して市民の文化及び教養の向上に資する」ことを目的とし、御殿場の貴重な文化資源である東山旧岸邸の運営を通して、地域振興に繋がる活動を展開している。
2022年度より、御殿場の芸能と食に焦点を当て、市民と専門家の視点からそれらを考察し、地域住民自身が御殿場の文化の魅力を発信するプロジェクトがスタート。初年度は、「雅楽」と御殿場の民俗芸能「神楽」などの比較実演や、地元食材を活かした食事の提供を盛り込んだイベントを計画。さらに地域の高校生らを対象に、このイベントの企画会議合宿を実施することとした。
※新型コロナウイルス感染予防の観点から本年度事業は中止とした。

伝統芸能「雅楽」

～担当コーディネーターの視点～

本事業は「多様性」を主眼においた取組であった。多世代で意見を交換する企画会議合宿の開催に向けて、高校や大学との連携や行政とのタイアップ、地域ボランティア団体や生産農家などへの協力依頼を早い時期から進めていた。しかし、参加者が定員に達し、いよいよ合宿というタイミングで、新型コロナウイルス第7波の影響により中止。合宿の中止はとても残念であったが、新しい何かが御殿場で始まるという機運の高まりは関係者全員が感じていたであろう。本事業で培われた関係性を足掛かりにした今後の展望が期待される。
（若菜ひとみ）

地元食材を活かした食事のイメージ

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

ひかり市民センター事務局
（静岡市／2022年度活動拠点：藤枝市）

竹林劇場プロジェクト
～タテにのびるダンス～

実施日（期間）：①竹林整備ワークショップ
2022年10/2、6、16、20、23
②竹林劇場でのダンス公演＆マルシェ 11/3

実施場所：①② 藤枝市谷稲葉の竹林

放置竹林を「社会課題」から「地域資源」へ

民設民営の多目的スペース「ひかり市民センター」を拠点に、0歳児向け親子イベントの実施、小学生くらいまでを対象とした習い事、子どもの居場所事業等を展開する団体。
今年度は、全国的な課題である里山の竹林を、地域住民とともに天然の大聖堂のようなパフォーマンス会場に生まれ変わらせるプロジェクトに取り組んだ。藤枝市の「竹部（ばんぶ）」など竹林整備団体と連携し、複数回にわたり竹林整備ワークショップを実施、最終的には整備された竹林を舞台に、ダンスグループ「素我螺部（スカラベ）」による新作公演及び竹にちなんだマルシェイベントを開催し、竹の有効活用について楽しみながら考える機会とした。

～担当ディレクターの視点～

このプロジェクトは、竹の驚異的な成長スピードを、高い可変性と復元性をもたらす特徴と考え、イベント会場としての竹林の活用法を提示した。竹は竹林のつくる雰囲気や、食から建造物まで幅広く活用できる資源としてその魅力が知られている。ここでは、それらに加え、可変で趣のある会場としてのポテンシャルを引き出すためにダンス公演を実施した。
着想もおもしろく、アーティストらによってより使い方が広がることも興味深いが、その魅力や活用の幅などを含めた明解なビジョンが伝達されることで更なる展開の広がりが見えるだろう。（鈴木一郎太）

参加者を募って会場整備を実施

竹林の模型を挟んで整備の相談

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

一般社団法人トリナス（焼津市）

ブックフェスタしずおか

実施日（期間）：ブックフェスタしずおか　2022年10/1～31
（メインイベント＆ブックマルシェ　10/22）

実施場所：静岡県内各所（メインイベント＆ブックマルシェ：グランシップ）

本がひととまちを繋ぐ31日間

未来が予測できない時代の複雑な地域課題を、異なる専門性を持つ人や組織を繋ぐことを通して創造的に解決することを試みる地域コーディネート集団。
今年度は、県内でも多くの書店が閉店するなど、“文化”である本を取り巻く状況が大きく変わってきている現状に着目し、県立中央図書館をはじめ、県内各地の書店、私設図書館、本に関わる活動をしている個人などが連携するイベント「ブックフェスタしずおか」を開催。トークショーやブックマルシェを各地で展開し、10月の1か月間、本で静岡を盛り上げた。さらにこのイベントをアーカイブし、本の未来について考察するための書籍発行にも取り組んだ。

～担当ディレクターの視点～

ブックフェスタ。すなわち“本のお祭り”は、アペリティフからデザートまで、すべて本を素材にして仕立てられたフルコースである。お祭りを楽しみ、フルコースを味わうのは“本”を通したコミュニティづくりを実践する・しようとしている人々。メイン料理は10月にグランシップで行われたイベントで、「“本”の存在が私たちの社会的役割をぬぐい取り、“本音”で過ごせる居場所を生み出す」と言ったことをテーマにトークセッションを繰り広げた。デザートは“本のお祭り”をまとめた“本”。これを読めばフルコースをまた味わいつくすことができるのだ。（北本麻理）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

藤枝宿世代をつなぐ
商店街づくり実行委員会（藤枝市）

藤枝ノ演劇祭２

実施日（期間） 2023年3/4、3/5

実施場所 蓮華寺池公園を含む旧東海道藤枝宿エリア

まちがつくる演劇祭

演劇を活用して、藤枝宿の白子名店街を中心にまちの潜在的資源を発掘し、地域の活性化を図ってきた団体。2021年3月のプレイベント「タイムスリップ！1964」を足掛かりに、翌2022年3月には旧東海道エリアの茶工場、寺、文化施設などを会場にした『藤枝ノ演劇祭』を開催し好評を博した。
2回目となる今年は「メンドクサイを楽しもう」をコンセプトに、関わる人どうしの繋がりをさらに深めた多彩なプログラムが展開。全国から駆けつけた演劇団体による公演のほか、名所旧跡や商店街などを案内人と歩く「まち歩きツアー」や、地元中高生による創作劇の上演、地域色あふれたミニマルシェなど、訪れた人がまちを楽しめる2日間となった。

～担当ディレクターの視点～

私の役割は演劇を語らずに、演劇祭を語ること。すると藤枝ノ（演劇）祭を考えることになる。祭の思い出は、東北で聞いた盆踊り歌。農事と家事に明け暮れる女性が、雀は自由にどこにでも行けていいな、というちょっぴり切ない踊り歌。だから、年に一度のハレの日を楽しみに待ちながら暮らす。この切なさが演劇公演で、ハレがマルシェやまち歩きのアクテビティ。演劇祭の中心は、藤枝駅からバスで15分ほど離れた長い商店街。商店街へ人の流れを生むことを目的にした、この祭。切なくてハレな商店街ノ祭となる日を待ちわびている。（北本麻理）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

NPO法人クロスメディアしまだ（島田市）

UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川2023

実施日（期間） 2023年2/23～3/19
※プレイベント　2022年12/17

実施場所 大井川鐵道無人駅周辺（島田市及び川根本町）

ヒデミニシダ『境界の遊び場Ⅳ／音の要塞』

無人駅の妖精に、出逢ったことありますか？

「スキだらけのマチづくり」をコンセプトに島田市周辺の地域づくりに取組んできた団体。大井川鐵道沿線の無人駅とそこから広がる集落を舞台に、アーティストと地域住民が密に関わりながら、作品制作から発表までを行う『UNMANNED 無人駅の芸術祭』を2018年より毎年開催し、全国的にも注目を集めている。
6回目の開催となる今年は、「まちなかエリア」としてJR島田駅周辺が展示エリアに加わるほか、抜里駅エリアに「アート回廊ルート」が整備されるなど新たな展開も見られ、人々の温かな生活の営みや大井川が育んできた美しい風景など、地域の魅力が13組の作家によって多彩に表現された。

さとうりさ『くぐりこぶち』

～担当コーディネーターの視点～

『UNMANNED無人駅の芸術祭』では、会場のあちこちで芸術祭との多様な関わり方を見ることができる。自身のエピソードを交えながら作品の解説をしてくれる住民、山頂に設置した作品兼展望台でお茶会を開いているご婦人方、自分の家を展示会場として貸し出す家主。自分なりの関わり方ができるというのは、それだけ芸術祭にアクセスしやすいことを意味する。あるアーティストは、晴れた日に展示する作品の出し入れを住民に一任する。住民は作品管理という関わり方で、これまで以上に芸術祭への愛着が増すことだろう。関わり方の手法が増え、自分なりの方法で芸術にアクセスしている本芸術祭の注目度は今後益々高まるに違いない。（若菜ひとみ）

丸山純子『ひかりとり』

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

原泉アートプロジェクト（掛川市）

原泉におけるアーティスト・イン・レジデンスの取り組みとその実践による地域振興事業

実施日（期間）原泉アートデイズ！2022
2022年10/13～11/27
※関連企画　HARAIZUMI ART CAMP
6/13～16,20,22,23,27～30

実施場所 掛川市原泉地区全域

のどかな里山の、循環する展覧会

掛川市北部に位置する中山間地・原泉地区にて、アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）の環境を整え、展覧会型アートイベント「原泉アートデイズ！」を主催する団体。5周年となる今年は『時間を考える』をテーマに国内外14組のアーティストが参加。地域内の旧茶工場や空き施設、空き家などを活用し、展示作品のほかパフォーマンス、ワークショップ、５周年記念講演会などが企画され、受付を兼ねたアートストアには原泉ゆかりの商品や展覧会オリジナルグッズが並んだ。さらに展覧会に先駆け、6月にはアート鑑賞とアウトドアを楽しめる「HARAIZUMI ART CAMP」も開催され好評を博した。

5周年記念講演会

～担当ディレクターの視点～

美術評論家の福住廉さんが「同じ釜の飯を食うアートプロジェクト」と評したように、5周年を迎えた「原泉アートデイズ！」は、キュレーションを排除する代わりに、滞在アーティストには毎日の食卓を囲むことを参加の条件に課しており、それらの手料理を主催者である羽鳥祐子さんが振る舞うなど、全国でも突出したアーティスト・イン・レジデンスの形態を生み出している。共食だけでなく、地域住民が滞在アーティストに採れたての食材を提供するなど、「食」は大きなコミュニケーションの要素と言えるだろう。
また、「原泉アートデイズ！」の期間中にはバスが増便するなど、本事業は地域の活性化にも大いに寄与しているようだ。（櫛野展正）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

袋井市文化協会グループ（袋井市）

月見の里学遊館開館20周年記念 市民音楽劇プロジェクト

実施日（期間）①市民音楽劇創作ワークショップ（2021年度～）
2023年2月
②市民音楽劇「月のうさぎ」上演 2/26

実施場所 ①②月見の里学遊館

市民劇に向けた積み重ねの場が育む文化的放課後時間

袋井市の複合型文化施設「月見の里学遊館」では2021年度に開館20周年を記念し、近隣の子どもたちを中心に、2年に1度音楽劇を上演する市民音楽劇プロジェクトを立ち上げた。公募で集まった参加者が、演技やダンスの練習だけでなく、舞台美術や衣装づくり、効果音をテーマとした表現ワークショップなどの体験を重ね、プロジェクトに関わる市民らが日ごとに繋がりを深めながら2月の上演本番を迎えた。さらに、小中学校での文化活動や部活動減少という課題に着目し、プロジェクト参加者らのデータや地域調査を元に、学校の部活動に代わる活動を地域の文化施設が担う可能性について検討した。

衣装製作の様子

～担当ディレクターの視点～

各分野の講師陣、参加者、家族、関わった専門家、地域などのはざまに、非常に丁寧なマネジメントがあったことによって実現された取組。
今後、この取組が続いていく中から地域での部活動の代替のような動きが生まれるのだとすれば、それは文化施設や大人が用意するのではなく、公演に向けたプロジェクトに参加している子どもたち自身から始まることがまっとうな道だろう。そしてそのためには練習や集まりにしっかりと自分が関与しているという実感が必要だろうし、そこから主体性と必要性が立ち上がるのだろう。そんな片鱗を感じさせた。（鈴木一郎太）

出演者や講師らの交流会

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

ダンスグループM･K
（磐田市／2022年度活動拠点：島田市）

SHIZUOKA舞伝プロジェクト

実施日（期間）
①表現＆作劇ワークショップ　2022年7/24
②作品上演　2023年3月

実施場所
①島田市民総合施設プラザおおるり
※本プロジェクトは諸般の事情により中止した

“舞台芸術県”静岡ならではの新しい伝承のかたち

2019年に発足した磐田市を拠点に活動するダンスグループ。人々に踊る楽しさを伝え、参加者同士の絆と生きがいの創出に繋げている。
今年度取り組んだのは、ダンスや演劇などの表現をプロから学びながら、地域に伝わる昔話を舞台作品に仕立て、作品の上演によって地域の魅力を発信する「SHIZUOKA舞伝プロジェクト」。参加者は2023年3月の上演に向けて、毎月2回のワークショップを通じてダンスや演劇に親しみ、地域（島田市）の歴史や伝承について学びながらアイデアを出し合って作品を創作していくこととした。
※本プロジェクトは諸般の事情により中止した。

～担当ディレクターの視点～

ダンスグループM･Kが実施した「SHIZUOKA舞伝プロジェクト」は、地域の民話の収集から、舞台作品の創作・公演までの一連の流れを、地域で募った有志が遂行するプロジェクトだった。
プロジェクトメンバーになった人たちが、劇作や演出等、各々に関心のある役割を持つことで、自分自身が活動を立ち上げたり、継続したりするための経験を積むことができるように設計されていた。また、歴史好きのコミュニティと舞台芸術に関心を寄せる層の相互交流促進から、新たな動きが生み出される可能性を高めることも狙ったプロジェクトだったが、残念ながら中止となった。関心を寄せる大人だけでなく、子どもたちとの演劇やダンスのワークショップも積み重ね始めており、日ごろ出会わない人たちが交ざって創作される期待感がふくらんでいただけに再始動を待ちたい。
（鈴木一郎太）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

社会福祉法人ひかりの園 浜松市根洗学園（浜松市）

アーティストと福祉と地域 ～見えないものを見るためのプロジェクト～

実施日（期間）
①表現を見つけるためのワークショップシリーズ　2022年9～12月
②ラジオ番組制作　9月～2023年3月

実施場所
①浜松市根洗学園、浜名協働センター、NPO法人地域生活応援団あくしす、浜松市福祉交流センター

アートで福祉をきわめる

子ども、障害者、高齢者等を対象に福祉事業を展開する浜松市の社会福祉法人。浜松市根洗学園ではこれまで10年以上にわたり「福祉×アート」の実践に取り組み、施設職員の創造性を高め、利用者や家族との関わりの活性化を図ってきた。
今年度は、音楽、演劇、ダンス、作業療法の分野から1名ずつ講師を招き、“表現”についての気づきを促すコミュニケーションワークショップシリーズ「やったことないをやってみる2022」を開催。さらに高齢者・障害者・児童とその家族らへ向けたラジオ番組「みえないものをみるラジオ」をアーティストとともに制作、YouTube配信を行い、福祉とアートの結びつきの有用性を伝える機会とした。

～担当ディレクターの視点～

それが誰のものであれ「作品」をつくることを介在させず、アーティストの職能、もしくは人柄そのものに期待をかけて、福祉×アートの実践をしている団体は全国的にみてもそこまで多くないのではないか。福祉現場の目標や課題と、アーティストの持つ技術や知見の親和性に事業を推進している方々が確信を持っているのだが、その言語化、価値の共有、伝達には苦労も見受けられる。
何を成し遂げて先に進んでいくのか意識し、小さいハードルをひとつひとつクリアし、地域の福祉業界にアーティストとの親和性に理解を示す人を広げてほしい。
（鈴木一郎太）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ クリエイティブ支援

NPO法人クリエイティブサポートレッツ

「表現未満、」プロジェクト ～街を舞台に 実装する！～

実施日（期間） オン・ライン・クロスロード2022 2022年10/22、23、29、30

実施場所 旧松菱百貨店跡地

表現未満、とは？

浜松市中心市街地に拠点を構え、障害のある人たちを核としながら、全ての人々が互いに理解し分かち合うことのできる共生社会づくりに取り組む団体、クリエイティブサポートレッツ。2016年度から展開する「表現未満、」プロジェクトは、個人が大切にしている行為そのものを表現と捉え、その人の存在の証として認めていくことで、様々な分断を超えようと試みる文化活動。2023年度はプロジェクトの一環として、浜松中心市街地の衰退の象徴ともいえる松菱跡地で、2回目となるアートイベント「オン・ライン・クロスロード2022」を開催。4日間で1万人以上が来場し、多くの反響があった。

～担当コーディネーターの視点～

人の存在そのものを「表現」と捉える「表現未満、」プロジェクトは、昨年に続き旧松菱百貨店跡地を開放する「オン・ライン・クロスロード2022」を開催した。今年の会場には、音楽や演劇を披露するステージのほか、ワークショップ「マイ『ベッド』タウンをつくろう」の参加者により制作されたベッドがいくつも置かれ、訪れた人がマットレスに寝転がったり、落書きをしたりと、思い思いの時間を過ごしていた。ベッドの組み立てで困っている人の元に自然と人が集まり助け合う光景は、当団体が目指す「共生社会」をコンパクトにした箱庭のようであり、等身大の自分でいることを許され、手を差し伸べ合うコミュニティが形成されているあたたかい場所であった。（若菜ひとみ）

文化芸術による地域振興プログラム

地域はじまり支援

アートプロジェクトの実施に向けた試行的な取組を支援。
今年度は、まちづくりや環境保全に取り組む団体、学生主体の団体、
オルタナティブスクールなど個性豊かな12の担い手たちが、各地でアートプロジェクトを展開。
子どもや高齢者、子育て世代、外国人留学生といった人々の思いや地域の背景にあたたかく寄り添い、
アートとともに未来をひらく確かな一歩を踏み出した。

団体名	プログラム名称	所在地
うさみみ	BOOK TOURISM IZU（ブックツーリズム伊豆）	伊東市
趣みん芸友の会	わたしの趣みん芸	伊豆市
Lab Qrio（ラボキュリオ）	廃材・端材のクリエイティブな利活用でリデュースなライフスタイルを！	三島市
Lead wiz-art（リード・ウィズ・アート）	伊豆文学賞作品舞台化推進事業	三島市
一般社団法人三保松原3ringsプロジェクト	三保松原の美しい景観を1000年先に繋ぐアート×保全の「ニュースタイル清掃」	静岡市
NPO法人静岡あたらしい学校	「あるもんで演劇」～演劇×オルタナティブスクール×オクシズ	静岡市
NPO法人ESUNE	いろりの畑プロジェクトーそこにフィールドがあったら	静岡市
Ce-on Music	しずおかのうた～岡部編～	藤枝市
ふくろい幕の内弁当実行委員会	ふくろい幕の内弁当	袋井市
浜学連 [はまがくれん]	浜松凧を揚げよう！	浜松市
赤ちゃんと人形のお店河田	Give to BABY art ～0歳から育てる豊かな心～	浜松市
SMS	浜名湖のその先へ　Re-flowering	湖西市

静岡県東部→中部→西部の順に掲載

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

うさみみ（伊東市）

BOOK TOURISM IZU（ブックツーリズム伊豆）

実施日（期間） 2022年10/1〜11/3

実施場所 伊東市、熱海市、東伊豆町、伊豆の国市、沼津市、神奈川県真鶴市の各施設

本で繋がる・広がる表現の輪

伊東市宇佐美地区の定住促進を目的に、地域の情報発信やコミュニティづくりに取り組む団体。

今年度は、年齢問わず誰もが親しむことのできる「本」を切り口に伊東市および伊豆半島の文化を掘り下げ、新しい観光資源を発掘・発信することをめざし、伊豆半島各地で本やまちづくりに関わる活動を行う団体や施設と協働して「BOOK TOURISM IZU（ブックツーリズム伊豆）」を初開催。会期中は、各団体や施設が、古本市やマルシェ、トークイベント、展覧会、井戸端会議など、趣向を凝らした様々な企画を実施し、本を介したコミュニケーションの機会を創出した。

〜担当コーディネーターの視点〜

伊東市宇佐美地区の空き店舗に設置した私設図書館の存在によって、「本」が様々な人の集まるきっかけとなり得ることを見出し生まれた企画。「本」をテーマに伊豆半島の文化施設や書店等27施設をつなぐブックツーリズム伊豆を開催した。

これは、「本」が持つマイクロツーリズム（近距離観光）創出の可能性を探る試みであると同時に、2025年度に伊東市に新しい図書館がオープンすることを契機として、住民側から行政側へ市民の機運醸成を提案する動きとすることで、市民と行政の意識を変えていきたいという心持ちを示すアクションでもあった。今後も中長期的なビジョンをしっかりと描きながら、時間をかけて着実に活動を広げてほしいと願っている。（立石沙織）

地域の本を活用しながら身近な話題について気軽に話し合う井戸端会議

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

趣みん芸友の会（伊豆市）

わたしの趣（しゅ）みん芸（げい）

実施日（期間） ワークショップ『今日からあなたも趣みん芸アーティスト』2023年2/18

実施場所 生きいきプラザ（伊豆市）

道の駅の作り手を追う

道の駅や農産物直売所で売られている、地域住民らの手作りによる手工芸品の魅力に着目し、これを「趣みん芸」と名づけ、作者への取材や作品収集を行う団体。

今年度は、作品の蒐集に加え、特に注目する作者４名を詳しく紹介するフリーペーパーを発行。また、年間活動の締めくくりとして、団体代表による取材報告を兼ねたトークショー及び、海岸で拾った流木を独自のセンスで見立ててネーミングしたものを作品として販売している「趣みん芸」作者によるワークショップを開催。会場ではこれまで収集した作品50点余りの展示も行い、「趣みん芸」の面白さや奥深さを伝える機会とした。

〜担当ディレクターの視点〜

PPバンドで作られた猫や、拾ってきた木を加工した杖など、「趣みん芸」で使用される素材は様々だが、共通するのは、あるものを別の要素に利用するという「見立て」の要素であり、そこには地域の人たちの手によって即興的に生み出されたアイデアが存分に発揮されている。その源流を江戸時代後期に江戸や上方で流行した見世物や祭礼の「造り物」に由来すると考えるならば、「趣みん芸」とは市井の人たちの手による日常的な造り物文化のひとつと言えるだろう。そして、名もなき、あるいは匿名の人々による巧みな手わざは、私たちの中に眠っているはずの創造性を呼び覚ましてくれる。（櫛野展正）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

Lab Qrio（ラボキュリオ）（三島市）

廃材・端材のクリエイティブな利活用でリデュースなライフスタイルを！

実施日（期間） ①ワークショップ「つくって発見★こどもアートdeサステナブル！」2022年6/26、8/21、11/6
②こどもアートプロジェクト展（ワークショップ同時開催）2023年1/28、29

実施場所 ①エコセンター（旧三島測候所庁舎）、みしま未来研究所、サントムーン柿田川
②Via701「Gallery 701」

ゴミも捨てたもんじゃない！つくって発見！こどもアート

「アートフル&サステナブルな社会」をキーワードに「子ども×アート×教育×環境」の活動を三島市周辺で展開している団体。
SDGsの実践には、身近な環境や文化を理解し、モノとの関わり方を見つめ直すことが必須と考え、ゴミ減量への意識を高めることを目標に、今年度は子ども向けの造形ワークショップを4回実施。企業や商店から収集した廃材・端材を素材に、子どもたちが自由にアート作品を制作することで、ゴミになりかけたモノを美しくよみがえらせ、それらの作品の展覧会も開催した。会場には、廃材・端材の産出過程や特徴を伝えるためのライブラリーも設置し、身の回りにあふれるゴミについて学ぶ機会とした。

～担当コーディネーターの視点～

子育て世代の母親たちが中心となって活動するLab Qrioは、子どもたちの個性や主体性を引き出す教育のあり方を模索している。そこには大人が子どもに一方的に教える姿はなく、彼らの主体性を見守る様子が印象的だ。子どもなりのアイデアで本来の役割を終えたモノたちを使ってどんなユニークな作品が生まれるのか。それがLab Qrioが最も大切にする価値観なのである。その姿勢に共感した地元企業や公的施設が少しずつ増えているのもまた特徴だ。廃材・端材を活用し、アート作品を制作することを通して、モノとの関わり方や、その価値を見つめ直すこと。そういったLab Qrioの呼びかけに、地域の「共創」の輪が着実に広がっている。（立石沙織）

「こどもアートプロジェクト展」

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

Lead wiz-art（リード・ウィズ・アート）（三島市）

伊豆文学賞作品舞台化推進事業“宝探しの会”

実施日（期間） リーディングカフェ 2022年7/21、9/21

実施場所 あひる図書館（三島市）、オンライン

伊豆➡文学➡舞台

文化・芸術による地域活性化、芸術活動の活性化をめざして、三島市を拠点に舞台芸術公演の制作・企画・運営による表現活動を展開し、地域のアーティストの発掘及び育成を行う団体。
2022年度は、伊豆東部をはじめ静岡を舞台に優れた文学作品を毎年世に送り出し、県の貴重な地域資源ともいえる「伊豆文学賞」受賞作品を、地域住民と共に舞台化していくプロジェクトを始動。参加者がその過程を通して地元への関心と愛着を深め、静岡県の魅力発信と地域活性化につながることをめざした。初年度はその第一歩として、受賞作品の朗読講習やリーディングカフェを開催し、舞台化するのにふさわしい伊豆文学賞作品を参加者とともに探す機会とした。

舞台化のイメージ（団体の過去のダンス公演より）

～担当ディレクターの視点～

伊豆を訪ねたことがなくても、川端康成の「伊豆の踊子」は誰もが耳にしたことぐらいあるのではないだろうか。タイトル通り、伊豆で踊子に恋をする物語だ。まるで伊豆を訪ねると、恋ができそうである。文学の描く世界は、読者を現実から虚像へと繋げる、文字であらわす空想世界だ。1997年から続いている伊豆文学賞が狙うのは、静岡県への空想の旅を案内してくれる文学作品を生むこと。この空想世界を舞台芸術で再現しようと挑むのが、Lead wiz-artの「伊豆文学賞舞台化推進事業“宝探しの会”」。伊豆の住民とともに、文学という「お宝」を見つけようとしている。（北本麻理）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

一般社団法人三保松原3ringsプロジェクト（静岡市）

三保松原の美しい景観を1000年先に繋ぐアート×保全の「ニュースタイル清掃」

実施日（期間） 2022年5/14、28、7/23、2023年2/11、25

実施場所 三保松原

松葉かき×アート ニュースタイル清掃

「三保松原の景観を1000年先につなぐ」をコンセプトに地域の企業や学生が連携し、世界文化遺産・三保松原の保全活動を通じて、新たなコミュニティや価値の創出をめざす団体。
2022年度は、保全活動と、朗読、大道芸、ダンス、演奏などのアートを掛け合わせた「ニュースタイル清掃」イベントを5回実施。無償労働と捉えられがちな地域の保全・清掃活動に価値を付加し、参加することに喜びや誇りを持てるようにすることで、活動に関わる市民の輪を広げる機会とした。イベントでは、保全活動を劇仕立てにするなど、アーティストが参加者と触れ合いながら、お互いの取組やその価値を認識できるような仕掛けを盛り込んだ。

～担当ディレクターの視点～

清掃活動は最小限の準備で多くの人が参加可能だ。三保松原での松葉かきは分別があまり必要ないことを思えば、気を配る要素が少なく気楽とも言えるが、逆に単調になりがちとも言える。一方、芸能の歴史を遡ると、過酷であったり、単純作業の繰り返しだったり、息を合わせる必要があったりする場面から人に親しまれる歌や踊りが生まれた例が多くある。
この活動は、企業人、学生、地域住民が交わる機会であると共に、かつてのように、関わる人の様々な表現が引き出される余白がプロデュースされることで、保全活動自体が観光資源として目的化される可能性があると感じた。（鈴木一郎太）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

NPO法人静岡あたらしい学校（静岡市）

「あるもんで演劇」～演劇×オルタナティブスクール×オクシズ～

実施日（期間） 2022年4月～2023年3月
（創作作品の上演　2023年3/4）

実施場所 静岡あたらしい学校（上演：静岡市賤機都市山村交流センター「安倍ごころ」）

子どもとつくる地域の演劇

「静岡あたらしい学校」は、静岡市葵区牛妻の自然豊かな環境にある古民家を活かした、静岡市初となるオルタナティブスクール。
今年度、学校に通う15人の子どもたちが主体となって取り組んだのは、SPAC（静岡県舞台芸術センター）所属俳優のほか、美術・広報・照明等の専門家も交え、地域に眠る人的・物的資源＝「あるもん」を活用しながら演劇作品を創作する「あるもんで演劇」プロジェクト。子どもたち発案のストーリーをベースに、地域の人たちの力を借りながら、計7回のワークショップを重ねて作品を練り上げていった。上演に向けた広報も子どもたち自身が行い、“創作過程で役割を担う人すべてが主役”という思いのもと生み出された作品は、3月、地域住民や保護者らに向けて発表された。

～担当ディレクターの視点～

SPAC俳優・宮城嶋遥加さんやテーブルシアターなど、オルタナティブスクールを訪れる人たちによって、子どもたちが抱いていた「演劇」の概念は緩やかに揺さぶられていった。さらに、学校を飛び出した子どもたちは「お助け隊」として地域の人にも協力を求めるなど、多様な人たちとつくり上げた「あるもんで演劇」は、レヴィ＝ストロースが著書『野生の思考』で用いたブリコラージュに通じるものがあり、脚本や衣装も手づくりした制作過程は創造性に富んでいたようだ。それだけではなく、場面緘黙（ばめんかんもく）がある子どもが人前で喋れるようになるなど、「あるもんで演劇」は子どもたち自身にも大きな成長をもたらした。
（櫛野展正）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

Ce-on Music（藤枝市）

しずおかのうた ～岡部編～

実施日（期間）ワークショップシリーズ　2022年7/24、8/21、9/18、10/16、11/13、12/4

実施場所　走生塾（藤枝市岡部）

時代をつむぐ 世代をむすぶ わらべうた

藤枝市出身在住の声楽家が中心となり、音楽を通した学びと交流に取り組む団体。地域の子守唄、遊び歌、風景にまつわる歌などを探り、世代間交流を通して地域資源を掘り起こすプロジェクト「しずおかのうた」を2022年度に始動させた。

初年度は藤枝市岡部地区に焦点を当て、同地区に残る昔の歌を通して昔の遊びや暮らしを探り、地域資源や文化の継承に繋げるべく、毎回異なるわらべうたを題材として取り上げる全6回のワークショップを開催。小学生～70代が参加し、高齢者の社会参加や世代間交流のきっかけにもなった。さらに音楽家も交え、専門知識や技術を用いて昔の歌の編曲や採譜の可能性を探り、未来に伝える価値ある資料の制作にも取り組んだ。

～担当コーディネーターの視点～

歌は史料となり、交流のきっかけとなりうる。今回取り上げた6つの曲は、藤枝市岡部地区並びに同市周辺で歌い継がれていた（と記録が残る）貴重なわらべうたである。ワークショップでは、当時の暮らしや風景が記された歌詞を頼りに、年配参加者たちの記憶を手繰り寄せながらみんなで共有する時間が設けられた。ある回は「この歌詞は間違っているんじゃないか？」などと参加者なりの見解も挟みつつ。そこに明快な答えはないからこそ、参加者の想像力を多様に引き出していたように思う。

コロナ禍により今もまだ満足に交流しにくい状況が続いている。だからこそ、小さくとも人と人とが寄り合う時間の尊さを感じてほしいと願う、貴重な取組である。（立石沙織）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

NPO法人ESUNE（静岡市／2022年度活動拠点：掛川市）

いろりの畑プロジェクト ーそこにフィールドがあったら

実施日（期間）2022年4月～2023年2月

実施場所　掛川市内各地の畑など

畑で芽生えるインターナショナル コミュニケーション

「一人ひとりが持つ可能性と、あらゆる組織が持つ可能性を引き出すことで、未来社会を想像・創造する」をミッションに多彩な活動を展開している、学生や社会人40名近くのメンバーからなる団体。

今年度は、地域に暮らす外国人や、コロナ禍で留学の機会を失った大学生らを対象とした交流や学びの場「オンライン日本語サロンいろり」（2020年より運用）の新たな展開として、掛川市北部の農地を拠点に、地元農家と連携して「いろりの畑プロジェクト」をスタートさせた。市内で働く外国人・大学生・近隣住民など様々な人が、畑づくりや関連イベントを通して対面のコミュニケーションを深め、豊かな異文化交流の機会が創出された。

～担当コーディネーターの視点～

人類は生命維持のため、有史上多くのモノゴトを開発してきた。中でも農耕は、人類にとって大きな意味を持ち、時に争いの原因ともなっている。壮大なる農耕に目をつけたのが「いろりの畑プロジェクト」である。国籍、職業、障害の有無などで区分されずそのままの人として、収穫を分け合うだけでなく、生きている喜びを祝い合ってきた。争いを招くのではなく、祝い合うことを目的としたことが、人類にとって新たな開発となるのではないだろうか。そして、祝い合うことを芸術表現としたのがこの「いろりの畑プロジェクト」である。（北本麻理）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

ふくろい幕の内弁当実行委員会（袋井市）

ふくろい幕の内弁当

実施日（期間）
①「フクロイエキマチフェスタ」への参加
2022年11/20　②コラージュワークショップ
11/26　③創作絵本募集12月中旬〜2023年
1/27、絵本づくり講座　2/18

実施場所
①三日月の森ギャラリーほか
②どまんなかセンター（旧中村洋裁学院）
③袋井新産業会館キラットあきはホール

弁当は、アートだ！

袋井市が、彩り豊かな弁当のように五感が満たされ、創造の心が膨らむ街になることを願うメンバーが集まり発足した団体。多様な人に受け入れられる、華のある「幕の内弁当」の姿をプロジェクトの全体像に見立て、子どもから大人まで様々な人が参加できるアートを活用したイベントの展開により、袋井の街を楽しくすることをめざした。

秋には、展示、ワークショップ、マルシェが一体となった袋井市主催のイベントに参加。また、袋井市在住・在勤・在学者に向けて「お弁当」をテーマとした創作絵本を募集し、応募者全員を対象に、応募作品の講評会を兼ねた絵本づくり講座も行い、市民の創造性を育む機会とした。

〜担当コーディネーターの視点〜

多種多様な食材がぎゅっと詰まった「お弁当」。クリエイティブな発想力でその特徴を地域の既存事業に取り入れながら、袋井市というまちを面白くしていこうとするのが「ふくろい幕の内弁当」だ。

例えば今回、農業事業者が新たに取り組んだのは、市内近郊で採れた数種類の農産物を盛り合わせた商品であり、それもまた、「お弁当」であると彼らは言う。どんな物事も「お弁当」に見立てることができる。この「見立て」こそ、現代社会が感じさせる閉塞感を脱却するため方法であり、発想力や創造力の正体なのだろう。

本事業の突飛な働きかけは、これまで個々に活動していた個人や事業者らを引き合わせ、新しい交流を生み始めている。

（立石沙織）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

浜学連[はまがくれん]（浜松市）

浜松凧を揚げよう！

実施日（期間）
①子ども向けイベント 2022年6/26、8/11
②全国凧揚げ浜松大会出場に向けた大凧制作
10月（浜松大会 11/20）　③地域イベントでの子ども向けワークショップ　2023年1/22、2/19

実施場所
①浜松子ども館、あいホール　②浜松学院大学（浜松大会：遠州灘海浜公園）　③三ヶ日青年の家、初生小学校体育館及びその前の広場

凧に集まるアートの予感と可能性

2020年に「浜松学院大学 浜松凧を揚げようの会」として発足した団体。学生が中心となり、浜松まつりの凧をテーマに、伝統、アート、地域の子どもたちをリンクさせながら活動を展開し、地域や教育、ものづくりに関する新しい価値の創出をめざしている。

今年度は、凧に使用される材料（和紙や墨、わんぱうと呼ばれる白抜き材）に親しみ、凧揚げを体験できる子ども対象イベントを複数回開催。さらに二畳の大凧を学生自身が制作し、全国凧揚げ大会への出場も果たした。本事業は、メンバーやイベント参加者が浜松凧の背景にある文化・伝統をとらえ直す機会となり、世代を超えた交流にも繋がった。

〜担当コーディネーターの視点〜

今から450余年前の永禄年間、浜松を治めていた引間城主の長男誕生を祝って、凧を揚げたことが始まりとの一説がある浜松まつり。歴史ある祭りであるがゆえ町単位での活動が多い中、当団体は浜松まつりにおける凧を、アートという切り口でこれまでにない横断的な活動に取り組んでいる。今年度は町内会主催の子ども向け講座の講師を依頼されるなど、本来の枠組みを超えた団体に成長しており、参加者が延べ12万人にもなる「浜松まつり」に、今後どのようなインパクトを与えていくのか。学生団体だからこその軽やかな動きにますます注目が集まっている。

（若菜ひとみ）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

赤ちゃんと人形のお店河田（浜松市）

Give to Baby art
～0歳から育てる豊かな心～

実施日（期間）2022年5月～2023年2月
（ベイビーシアター 5/22）

実施場所 赤ちゃんと人形のお店河田

地域と支える コンニチハ赤ちゃん

創業90余年の赤ちゃん・子ども用品専門店。本業の傍ら、豊かな子育てのできる地域づくりに貢献すべく、赤ちゃんやその家族らを対象としたアートイベントを、店舗を拠点に定期的に開催している。

近年の少子化、核家族化、さらに新型コロナウイルス感染拡大の影響により、子育て世代の孤立傾向が進み、彼らが様々なストレスを受けていることに課題意識を持ち、今年度は、BEBERICA theatre company及びSPAC（静岡県舞台芸術センター）所属俳優の協力のもと、ヨーロッパ発祥の舞台芸術「ベイビーシアター」の上演を核に据えた事業を展開。“観る”のではなく“感じる”観劇の時間を通して、保護者らが、赤ちゃんとの言葉以外のコミュニケーション方法に気づき、「子育ては豊かで楽しい！」と思える機会を創出した。

～担当ディレクターの視点～

赤ちゃん＋芸術。
微笑む赤ちゃんの絵、赤ちゃんの眠る音楽が流れる部屋。これらの赤ちゃんたちは芸術の対象であると同時に、自らも表現している、微笑んだり眠ったり。この微笑みや居眠りを、大人になっても見失わないように願うのが、赤ちゃん用の商品を販売する「赤ちゃんと人形のお店河田」である。絵筆を持って絵を描く赤ちゃんと、ただ微笑んでいる赤ちゃん。どちらを思い浮かべたとき、あなたは微笑んでいますか？
というような問いかけを孕んだ事業に挑んだ、母でもある河田愛さん。微笑みたい人をいつも待っています。（北本麻理）

文化芸術による地域振興プログラム ｜ 地域はじまり支援

SMS（湖西市）

浜名湖のその先へ
Re-flowering

実施日（期間）①歴史発掘お話会 2022年7/14
②浜名湖のその先へ Re-flowering 9/23、24、25

実施場所 ①おんやど白須賀ほか白須賀エリア
②白東館（旧吾妻屋）

静岡県最西端のアートプロジェクト

かつて東海道五十三次32番目の宿場「白須賀宿」が置かれ、交通・輸送の要衝として、江戸や上方、地方の文化が融合する場であり、旅籠や茶屋が軒を連ねる交流拠点でもあった湖西市白須賀地区。現在は住民の高齢化が進み、賑わいが失われている。

2022年、この地で再び文化が花開くことを願い、湖西市出身メンバーを中心とした、文化芸術に従事する3人が集まり活動を開始。初年度は元旅籠の歴史的建造物「白東館」を舞台に3日間のアートイベントを展開し、アーティストによる作品展示、子どもから大人まで楽しめるワークショップやマルシェなどが開催された。

～担当コーディネーターの視点～

「文化が再び花開く」という意味を込められ開催した初年度。本事業の真の成果は、事業終了後に見ることができる。白須賀エリア内にあるビオトープ（生物群集の生息空間）を管理する地元のNPOは、本事業に影響され、ビオトープでの絵画展示を実施した。また、イベント来場者のお気に入りポイントが書き込まれた白須賀MAPには、町の将来像が書き込まれたことで、白須賀の未来を語る材料になっている。今もなお余韻が残る本事業は、白須賀を発展させたいと願う住民の手によって終わることのない現在進行形のアートプロジェクトに昇華した。（若菜ひとみ）

2022年度「文化芸術による地域振興プログラム」

キックオフミーティング

■日時：2022年5月24日（火）13：00〜16：00
■会場：グランシップ　6階 交流ホール

■プログラム
1.「文化芸術による地域振興プログラム」について（説明）
2. ワークショップ「他己紹介」
3. 発表

ワークショップと発表の内容

1. 各2団体ずつ15の島をつくり、実施団体代表者1名が相手団体の代表者に活動等のインタビューを行う。組み合わせはあらかじめ決めておき、受付で提示。
2. インタビュー内容は、メモに記載し終了後にメモを置いて別の島へ移動。
3. 時間になったら、移動先の別の島に置いてあるメモを読み上げて、その場で発表する。
4. 補足があれば、発表された実施団体が追加する。

「文化芸術による地域振興プログラム」が支援しているのは、住民プロデューサーが旗振りし地域の課題に向き合いながら、課題そのものについて、そして課題に向き合うことで見えてきたものごとを周りの人にも伝え、その輪が広がることでいろいろな人たちが心豊かに健やかに暮らせる地域づくり、社会づくりを目指すアートプロジェクトである。2022年度は、31のアートプロジェクトが静岡県内各地で実施され、そのキックオフとして5月にミーティングを持った。アートプロジェクトを運営する人たちが一堂に会するということは、凝り固まった今の社会から一歩進み出し、未来の地域社会をより良くしたいと、強い気持ちと行動力を持つ人たちが集まることを意味している。

ワークショップでは、自身のプロジェクトを自ら紹介する形式をとらず、他の実施団体が事業内容を聞き、また別の団体が事業内容を発表するというルールのもと、それぞれの実施団体同士が相手団体に向き合い、伝えたい言葉を丁寧に聞き出し、また別の誰かに伝わる言葉を選びながらメモを取っていた。

他者を介することで「伝える言葉」が「伝わる言葉」へ変化したことを実感した住民プロデューサーの皆さんが、口々に「（自らの事業が）よくわかるようになりました！」と嬉しそうにしていた表情が印象的であった。

「想いを伝える」から「想いが伝わる」。この変化が、“表現（アート）の源”だと感じた時間だった。　（北本麻理）

「2022年度文化芸術による地域振興プログラム」成果報告会

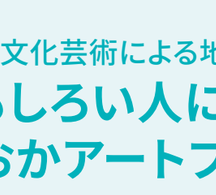
おもしろい人に会いたい!!2023 −しずおかアートプロジェクト見本市−

■日時：2023年3月12日（日）10:00〜16:30　■会場：グランシップ大ホール・海

「文化芸術による地域振興プログラム」の2022年度実施団体（p11〜43/以下「実施団体」という）による1年間の活動報告を主軸に据えた大規模イベントを開催。アーツカウンシルしずおかの取組を多彩な切り口で紹介し、「アートプロジェクト」への期待感を醸成することをめざした。

−実施コンテンツ−

アートプロジェクト プレゼンリレー&MAW 座談会

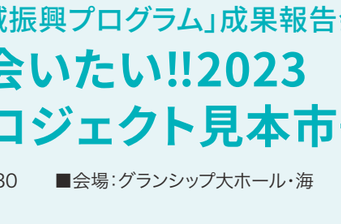


実施団体によるリレー形式の活動（成果）報告及び、マイクロ・アート・ワーケーション（MAW・p50〜53）のホスト経験者による座談会。県内の“おもしろい人たち”の活動を知り、その思考に触れる機会とした。

実施団体紹介&交流エリア

31の実施団体が、チラシやパンフレット、ポスター、PR動画などを使って活動を紹介するエリアを設け、来場者と団体、また団体同士の交流を図った。

5つの実施団体によるワークショップ



オリジナル怪獣づくり（熱海怪獣映画祭・p14）、原泉産の木材で彫刻体験（原泉アートプロジェクト・p26）、廃材を使ったバッジ作り（Lab Qrio・p34）、即興演劇体験（静岡あたらしい学校・p37）、花を使った菓子作り（SMS・p43）といったユニークなラインナップ。ワークショップエリアは子どもたちを中心に常に賑わっていた。

●実施団体による物販エリア

「蛸みこし」体験&蛸にまつわるトークセッション

会場では、今年度のMAWに参加したアーティストによる作品《蛸みこし》を誰でも自由に担ぐことができた。《蛸みこし》が意味すること（p47〜48参照）、その制作にまつわるストーリー等をパネル展示や映像で紹介し、専門家、アーティストとのトークセッションも実施。サプライズ出演したダンサーによる、本物の蛸さながらのパフォーマンスも客席を魅了した。

オープニングライブ「ゴジラ伝説 2023in 静岡」

熱海出身・在住のアーティストたちを中心とした生ライブに、県内外から300人を超える観客が集まった。本ライブは、過去には「熱海怪獣映画祭」（p14）でも上演されている。

「超老芸術」展覧会

超老芸術（p59）の初となる展覧会を開催。6名の出展作家が来場者と交流を深めた。

出張図書館 from 静岡県立中央図書館

絵本、アート、民俗学専門書籍など、静岡県立中央図書館の監修により100冊以上の本が 会場中央の交流エリアに並んだ。

静岡の食文化を感じる「おやつ」提供

食文化に関するアンケートに回答した先着100名に焼津の「みそまん」島田の「急須もなか」と静岡茶のセットを提供した。（県内9店舗の協賛による）

クロージングライブ「しゃぎり」

イベントの最後は、しゃぎりフェスティバル実行委員会（p18）の出演による、三島伝統の祭囃子「しゃぎり」生ライブで大団円となった。

当日は就学前の子どもから高齢者まで900人近くが会場を訪れ、あちこちで幸福な“出会い”のシーンを見ることができた。
ステージ上での大ダコとゴジラの邂逅に始まり、ライブ出演者との対面に感激する往年のファン、アート関係者と貴重な資料を囲み話がはずむ実施団体、息を合わせて変幻自在の«蛸みこし»をかつぐ初対面同士の人々、ワークショップエリアでカラフルな素材に目を輝かせる子どもたち…。思いがけない“おもしろい出会い”は、驚きや喜びとともに人の可能性の扉をひらき、予想を超えたおもしろい明日を引き寄せる。

アーツカウンシルしずおかの考える「アートプロジェクト」とは、言うなれば“みんなでわいわいガヤガヤ、あーでもないこーでもないと進める未来づくり”。
地域の未来を見つめ、その可能性をひらくために様々な出会いを生み出すべく工夫を重ねて動く人たちを、これからも支援していくアーツカウンシルの想いが具現化された賑やかな1日となった。

《蛸みこし》としずおかアートプロジェクト見本市

みんなでつくってみんなで楽しむ地域のお祭りは、すべての人がつくり手となる。アーツカウンシルしずおかでは、この誰もが主役になれるお祭りのように、住民の方々が自ら地域を元気にしていくアートプロジェクトを応援している。

2022年12月から「おもしろい人に会いたい!!2023−しずおかアートプロジェクト見本市」の当日までの間、アートプロジェクトの面白さを体験できる機会をつくっていくプロジェクト「かつぎにおいでよ！蛸みこし」を立ち上げた。

《蛸みこし》とは？

《蛸みこし》とは、「蛸の脚はその1本1本に独立した知性がある」という研究に着想を得てつくられた、芸術探検家・野口竜平（たっぺい）さんの作品。これは野口さんのアート作品であると同時に、8人で息を合わせて担ぐことで、その瞬間だけに存在する小さな「共同体（きょうどうたい）」をつくりだすためのアートプロジェクトでもある。
人々は蛸の脚を1本ずつ担ぎながら、自然とみんなで息を合わせること、一人ひとりバラバラな意識を持ったままでいることを繰り返す。すると、刻々と変化する8人の関係の様相が、蛸の踊りとなって現れていく。

朝霧が立ち上るなか《蛸みこし》を担いだ三島での様子

蛸みこしと富士吉原との出会い

野口さんは、今年度のマイクロ・アート・ワーケーション（以下、「MAW」p50〜53参照）に「旅人」として参加。2022年10月に約1週間、富士市吉原地区に滞在し、吉原地区ゆかりの竹取物語の伝説や、地元企業の染色技術、吉原祇園祭の文化などをリサーチしている。
その数日間の滞在で表れた、アーティストの地域を見つめる視点、常に新しい物事に出会っていこうとする探究心や自然と人を惹きつける対話の力、さらに《蛸みこし》という作品の「自分も担いでみたい」と人々に感じさせる魅力にアーツカウンシルしずおかが期待を寄せたことで、今回の「かつぎにおいでよ！蛸みこし」が生まれた。
2023年1月、野口さんは再び富士市吉原地区に滞在し、今度は約1ヶ月間《蛸みこし》を制作するための「蛸みこし研究センター」をひらいた。日々近所の人々が立ち寄るこの場所には、蛸みこしづくりと並行するように歴史や文化に関する情報が蓄積されていった。竹や蛸といった身近なモチーフから生まれた《蛸みこし》や野口さんというアーティストの存在は、吉原の人々の創造性を刺激し、次々とユニークなアイデアや提案を導き出した。

マイクロ・アート・ワーケーションで訪れた富士市内の染色工場で《蛸みこし》について説明する野口さん（左）

蛸みこしが旅した静岡県

2023年2月には、まだ見ぬ「自分も担ぎたい」という人に出会うため、富士市吉原地区から出発して《蛸みこし》が県内各地を旅するツアーを野口さんと一緒に実施した。
2022年度のMAWにホストとして参加した森町、三島市、東伊豆町の3団体に口ケ地の提案や担ぎ手への声かけなどを依頼し、地域の人々が《蛸みこし》を担ぐ様子を動画で撮影した。
行った先々でその地に暮らす人々と一緒に担ぐコラボレーションを行うことで、「自分も担いでみたい」「自分たちならこうしたい」という関わる人々の創造性を引き出し、みんなでわいわい活動する楽しさを実感する機会となった。

森町で行われた蛸みこしツアーに参加した皆さんとの集合写真

森と町づくりの会（横山春人さん、榊原希美さん、岩瀬進哉さん）

メンバーの間で「これは子どもたちと担いだらおもしろい！」という話になり、参加する地域の人たちが最後まで楽しめるにはどうしたらいいかと考えた結果、森町オリジナルの脚本が生まれました。
森町を縦断する太田川上流の山間部から川を下り町へ。タコになりたい夢を見ていた子グモと、大ダコが出会って戯れながら、最後は天竜浜名湖鉄道を背景に再会するというお話です。
後日談になりますが、参加者の一人が「子グモみこし」をとても気に入り、ご家族に「同じのをつくって！」と頼んで再現したそう。これから布を貼ったり、中でキャンプや食事もしたりとノリノリ。私たちも今度見にいこうと思っています！

横山さん

榊原さん

岩瀬さん

蛸みこしをきっかけに、“アートプロジェクトだからできること”を考えてみる

ここで《蛸みこし》を起点に、目の前の地域や暮らしを今よりもっとおもしろくしていく”アートプロジェクトの可能性”について、下記の4つの視点で考察した。

1 個人の思いからはじまっている

《蛸みこし》は、「蛸」をモチーフに人間の社会を考えてみるという、一人のアーティストの発案からはじまった。「どうにかしたい」という課題意識や、「おもしろくなりそう」という期待感は、日々の暮らしや仕事の中で、私たちの中にも芽生えているのではないだろうか。個人の思いそれ自体の価値を認めて、社会や組織に問いをなげかける活動の出発点にできるのがアートプロジェクトである。どこかから持ってきた「借り物の価値観」ではなく、いいと思ったものをいいと言える個人の思いそのものが、地域社会を動かすきっかけになる。

2 “わからない”にも向き合ってみる

はじめて《蛸みこし》に遭遇する人は、その不思議な姿から「あれは何だ？」「何のために？」と戸惑うだろう。しかしその答えはひとつではないからこそ、私たちは《蛸みこし》を担ぎ、ふにゃふにゃの竹から伝わる重みや弾力、相互に作用しあう担ぎ手8人の力を体感する。実際に触れることで得る感覚と経験によって、自分なりの答えを導き出せるように。
アートプロジェクトには明確な答えがないゆえに、関わるみんなが自身の考えを伝え合い、互いの価値観の違いを見出していくプロセスが重要である。時間をかけて問いに向き合ってみれば、新しい発見や出会いがあるはずだ。

3 バラバラなままでも一緒にいられる

みんなでつくってみんなで楽しむお祭りは、同じ地域に暮らす「共同体（きょうどうたい）」としての表現活動だ。一方、移住や多拠点生活が一般的になった昨今、そこに関わる人々は多様化している。そこでは異なる背景や思考を持つ個人の存在を認め、一人ひとりの違いを尊重し合える関係性が求められるのではないか。全員がバラバラな考えを持ちながらも一緒にいられる状態を、野口さんは「共異体（きょういたい）」と表現し、《蛸みこし》の脚を支える8人の姿に照らし合わせる。違いこそが面白いと思える価値観を地域に広げていくこと、それもまたアートプロジェクトができることである。

4 気づきの波がひろがっていく

竹、蛸という身近なモチーフから生まれた《蛸みこし》は、誰もが参加できるアートプロジェクトだ。そこでは「担ぐ」だけでなく、《蛸みこし》に遭遇すること、見守ること、それらを通して何かしら考えることも「参加」の形である。
様々な人を多様な方法で巻き込んでいくアートプロジェクトは、最初は受け身だった人も刺激を受け、自身の活動や事業の打開策を見つけることもある。この気づきは次なるプロジェクトの種であり、閉塞感のある現代社会に新しい風を吹き込むためにも欠かせない。この気づきを一人でも多く社会全体へ伝播していくこと、それが私たちのアートプロジェクトに期待することなのである。

かつぎにおいでよ！「蛸みこし」

しずおかアートプロジェクト見本市の会場では、来場者が3体の《蛸みこし》を実際に担いでみることとした。そこでは、ふにゃふにゃした蛸の脚から得る身体的感覚は、凝り固まった身体やイメージを解きほぐし、みんなでひとつの物事に取り組むことの「楽しさ」と「むずかしさ」を感じさせてくれた。この体感こそが、それぞれのアートプロジェクトを想像したり、今よりもっとおもしろい未来について考えてみたりするきっかけとなっていくはずだ。アートプロジェクトやアーティストの存在に期待を寄せる人が1人でも多く増えていくことを願っている。（立石沙織）

主催事業

- ●マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）
- ●クリエイティブ人材※の派遣制度
- ●アーツカウンシルしずおかアソシエイト制度
- ●クリエイティブ人材副業調査
- ●地域産業とクリエイティブ人材マッチングモデル事業
- ●地域づくりフォーラム「クリエイティビティと地域のイノベーション」
- ●アートライティング講座「かきかたきかく」
- ●超老芸術
- ●相談窓口

※アーツカウンシルしずおかの事業においては、地域住民など「関わる人の創造性を引き出す、アーティスト、アートディレクター、アートマネージャー、キュレーター等」を『クリエイティブ人材』と定義している。

マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）2022

●実施期間　2022年8/1（月）〜11/13（日）
●実施場所　県内12地域

旅人（クリエイティブ人材）※五十音順

秋野深、安里槙、東弘一郎、池田ひとみ、石黒健一、伊藤雄一、井原宏蕗、折田千秋、癸生川栄（eitoeiko）、金暎淑、草野冴月、坂井存、櫻井麻樹、さとうなつみ、していいシティ、私道かぴ、柴田まお、清水玲、周逸喬、新造真人、菅原康太、鋤柄ふくみ、鈴木雄大、関根愛、高野ゆらこ、戸井田雄、仁科亜弓、西松秀祐、西本春佳、野口竜平、橋本誠、濵田竜也、町田有理、美音子、本原令子、嘉春佳、米原晶子、Rui Yamaguchi

事業のねらい

マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）は、静岡県内各地で活動する団体が「ホスト」になり、アーティスト等のクリエイティブ人材を「旅人」として１週間程度受け入れ、地域住民と同人材が出会うきっかけをつくる事業である。昨今、地域芸術祭等の台頭により、都心部以外の中山間地等においても、クリエイティブ人材の活躍が期待されている。本事業では、地域とアートが協働する手前にまず互いを知る機会を設け、将来的にホストや地域住民が主体となり、当該地域の可能性を引き出す新しいアートプロジェクトが生まれることを目指している。

実施内容

ホスト、旅人ともに公募をし、両者のマッチングを行った結果、県内全域で12団体のホストと、15都府県から38名の旅人の参加が決定した。アーツカウンシル主催のオリエンテーションをホストごとに実施したのち、2022年8月から11月の間でホストと旅人が日程調整を行い、3泊4日〜6泊7日でホストの活動エリアに旅人が滞在した。旅人には作品制作といった成果物を求めず、Webサイトnoteで滞在中の気づきの発信をお願いした。

マイクロ・アート・ワーケーション2022で『ホスト』に起きたこと・気づき

（MAWnoteより抜粋）

マイクロ・アート・ワーケーションでは、作品等の成果物の代わりに、
日々の滞在についてWebサイトnoteへの記録を依頼している。
滞在中に起きた、変化や気づきについてホストと旅人が書いたnoteから、一部を紹介する。

“アーティスト=すごいひと”みたいに構えちゃうと、ちょっと損かもしれません。彼らはアーティストの前に“人”なので、「へー、そんな視点もあるんだー」くらいがちょうどいいと思います。
アーティストはもともと好奇心センサーの感度がすごいので、私たちにとっての日常からも“おもしろい”をどんどん発見します。だから、アーティストが納得するようなすごい場所・人を紹介しようと気負う必要はないと思います。
移動中に見かけた店や景色からもいろんなインスピレーションを受け、それを吸収しているのを感じます。
彼らと話をするなかで、私たちの日常に変化や新たな視座を生み出してくれるので「こんなこと言ったら失礼かな？変かな？」と思わずに対話することで得られることがたくさんあります。
富士山文化ハウス「2年目のMAW総括は旅のはじまり」より抜粋

旅人たちが見た景色や、地元の人たちと交わした会話は当たり前にいつもこの町にあるものなはずなのに、それぞれのみなさんの受け止め方に特徴があって新鮮な印象を受けました。
旅人のみなさんが見たこの稲取という港町を追いかけることで、日々の足元の暮らしに向きがちな目線がいかに多くのものを見落としてしまっているのか、見えなくなっているかを思い知らされたと同時に、固定概念に囚われてしまっている自分自身の視点を疑い続けることの大切さを再認識する機会となりました。
合同会社so-an「虫の目、鳥の目、魚の目」より抜粋

本原さんの興味の中に上水や電力のことがあり、秋葉ダムを一緒に見学しました。
やはり印象に残っているのは「位置エネルギー」のお話。
東京の上水は「蛇口をひねるだけで電力を使う」「東京都上水局は東京電力の一番の顧客」というくらい、水を運ぶのに電力を使うのに対し、浜松の上水は土地の高低差を利用して水を運んでいるので電力消費が少ないのだそう。
秋葉ダムが、龍山が、ここにあるというだけでエネルギーを持っているということ。ハッとしました。
また秋葉ダムや電気のことを熱心に、誇らしげに語ってくださったJ Powerの松本さんや、現場で働いて私たちのインフラを支えてくださっている職人さんたちの頼もしさたるや。これは龍山の誇りでは？
「インフラ↔アート」という一見かけ離れていそうなふたつですが、本原さんの視点のおかげで気づくことがありました。
龍山未来創造プロジェクト「アーティストの審美眼」より抜粋

僕自身、地域にアーティストが入るなら、制作物をつくることまでが前提だと思っていた。しかし、旅人の一人の方がこんなことを話してくれた。
「１週間滞在して「こんなものができました」と中途半端な発表をしても、すごく薄いものができあがってしまったり、地元の人とのコミュニケーションが悪くなったりする場合がある。それよりは、この土地で受け取ったものを、別の場所だったり、少し期間を開けて、アウトプットに変えた方がいい場合もあると思うんです。」
なるほど。
僕は宿以外にも漫画を描いたり、企画をつくったり、比較的に“つくることありき”で考えていた人間としては、つくること＝えらい（至上主義）になっていた気がする。
はっとさせられた。
<中略>
つくるが目的になるのではなく、「出会い、交流すること」こと旅人や、地域の人にとって新しい視点が生まれたり、何かが起こっていくのかもしれない。
一般社団法人南伊豆編集室「静岡県 南伊豆町でマイクロ・アート・ワーケーション2022のホストをやってみて。」より抜粋

マイクロ・アート・ワーケーション2022で『旅人』に起きたこと・気づき

旅が終わる朝、毎日歩いた川をもう一度歩きながら、気づいたことがある。
そうか、この川は、ここに暮らす人々の鏡なんだと。
川が自分の庭であり、生活の、暮らしの中にある分、そこに住む人は丁寧に暮らさないと、それは川にすぐ反映される。良いところも悪いところも。
だから、ここに暮らす人々は本気で動いているのだ。
夏には蛍が飛び交う環境が保たれるよう、川周辺の草の刈り方について市にかけあう人がいたり、季節ごとにやってくるトンボが減った理由を探って勉強会を開き、やはり水辺の草を刈り過ぎているという原因を探りあて、草の根的に改善していく人もいた。
今回のホスト、シタテの山森さんが運営するゲストハウスgiwaやコワーキングスペースクロケットには、単なるスペース提供の場に終わらない仕掛があちこちにある。その一つ、毎日1時間だけオープンするgiwaのバーでは、三島を一時訪れる人が三島暮らしの面白さを味わえたり、移住者同士や地元の方との繋がりができたり、欲しい情報を得たり、とにかく色んな機能がある。こういった仕組みと、そこに集う人々の魅力が、三島への移住者が急増している理由になっていると思う。
<中略>
最初に書いた、川という鏡についてまた考えてみる。私にとっての鏡はなんだろう。やはり自分の作品だ。それが見たくて、今までやってきている。
でも、鏡は本当はもっと身近なところにあって、見ようと思えば見れるのだ。
ただ、鏡の見方を、その存在も、私たちは忘れてしまう。
そんな時は旅に出ると良い。
どこでも良いけど、三島をお勧めする。

金映淑キムヨンスク「(三島滞在まとめ)川という鏡を持って生きる」より抜粋

人と出会い、話をして、相手と深く関わってゆく。
「俳優」という職業は、この作業の繰り返しだ。
舞台公演だと大体1ヶ月くらいの稽古期間で座組の人と密なコミュニケーションをとり、信頼関係が生まれる。
恋人だったり親子だったり親友だったり、それまでは見ず知らずだった人と急にそんな関係を演じるわけだから、コミュニケーションは欠かせない。
相手に触れたり、いきなり大きな声を出したりできるのも、信頼あってのものだ。
いい芝居を作りたいからこそ、相手を信頼して、自分を開いていく。
河津に滞在して、仕事上で何気なくやってきた自分の行動がもしかしたら「技能」と呼べるものなのかもしれない、そう気づいた。
<中略>
「劇」を上演するだけが、俳優ができることではない。
地域とアートを結びつける、それはもしかしたら地域の方々が生きていく中でコミュニケーションをこれまでより取りやすくなる、心を開きやすくなる、そんなお手伝いをすることも可能性の一つなんじゃないかと思った。

高野ゆらこ「よそもん【河津町滞在まとめ】」より抜粋

◀「じゃんけんグリコ」をしながら、神社に続く長い階段を楽しく登りきった。

自分いま「ホットサンドメーカー」を使ったプロジェクトやってて、富士市って工場の街なので在日労働移民者が多く、特にブラジルの人が多いのね。
※商店街にブラジル人向けの滞在サポートする施設あるくらい
この事実知った時震えたもん…だってホットサンドメーカーってブラジル発祥やから！！！！
※向こうでは「バウルー」と呼ぶ
もう引き強い通り越して怖い！！怖いよ！！まだ18時間なのに色々情報量すごいよ！！！
これ、完全に自分が好きな旅のスタイル。自分の予想を超える出来事が起きまくる。ザッツ・漂流！

Rui Yamaguchi「滞在18時間にして俺はもう次回のマイクロアートワーケーションへの応募を決意してるし、引き強すぎて逆に怖いよ静岡県富士市(1日目)」より抜粋

▶ホットサンドメーカーでオリジナルホットサンドを作るワークショップの様子

県内の至るところで旅人やホスト、住民、地域に様々な影響を与えたマイクロ・アート・ワーケーション。本ページではその一部を紹介した。なぜなら旅人に作品などの成果物を求めない本事業において、旅人とホスト双方の気づきや発見こそが本事業最大の成果だからだ。そして、今回紹介したnoteに限らず、旅人のnoteを読むと本県にまだ顕在化していない資源や魅力があることに気づかされる。アーティスト等のクリエイティブ人材と地域の出会いという化学反応が今後どのような未来を描くのか、注目していきたい。

（若菜ひとみ）

マイクロ・アート・ワーケーション（MAW）2年目の変化

MAWによって生まれたアーティスト等のクリエイティブ人材と地域住民の出会いが、2年目にして少しずつ芽吹き始めている。
ホストやその周辺の人々の中にアートやアーティストに対する期待感が醸成され、既存の取組にアーティストの関わりをつくったり、新しいプロジェクトが始動している。
アーツカウンシルしずおかにおいても、こうした地域やホストおよびその周りで起きつつある変化を把握しながら、「旅人」であるクリエイティブ人材の活躍の幅を静岡県内で広げていくためのパイロット事業等に取り組んでいる。

地域やホスト およびその周りで起きつつある変化

(1)松崎まちかど花飾り実行委員会「松崎まちかど花飾り」

2021年度、松崎町のホストを勤めた松崎町観光協会と松崎町役場は、双方が実行委員会として関わる観光イベント「松崎まちかど花飾り」に「旅人」として同町に滞在したアーティストを再度招き、アーティストと町民がコラボレーションすることで、町の魅力を深掘りし、町民の創造性をさらに引き出すアートプロジェクトを実施した。(p12参照)

過去に手掛けたプロジェクトを事例に
松崎まちかど花飾りでできることを提案する持塚三樹さん

(2)三島アートプロジェクト実行委員会「三島アートプロジェクト」

2年連続で三島市のホストを担った株式会社シタテでは、「旅人」として昨年度受け入れたキュレーターと連携し、三島の関係人口を創出するためのアートプロジェクトを立ち上げた。2022年度はその試行として、3組のアーティストがリサーチをし、地域の人々に自己紹介をするための展覧会を開催した。

三島アートプロジェクトの展覧会のようす

(3)龍山未来創造プロジェクト「龍山、ぽちゃん」

2年連続でMAWを実施している浜松市天竜区龍山町では、ここでのつながりを一過性のものにしないよう、ホスト自ら助成金を得て展覧会を企画した。そこでは、「旅人」たちの滞在期間中の記録や、MAWでの滞在後に地域にインスピレーションを得て制作した作品を展示し、アーティストならではの地域の見方を地域住民に披露する機会をつくった。

「龍山、ぽちゃん」にて作品を発表した
旅人の蜂谷充志さん(右)と蜂谷さんの学生たち

アーツカウンシルしずおかの取組

MAWを通じてクリエイティブ人材らの地域を掘り起こす探究心や視点の面白さを実感したことから、アーツカウンシルしずおかでは、彼ら彼女らの特異性を各地域の事業や活動に活かしやすくするための新しい仕組みづくりに取り組んでいる。
「旅人」に実施したアンケート結果を受けて、クリエイティブ人材の副業に対する意向と企業のニーズを探る調査、地域産業とクリエイティブ人材をマッチングさせるモデル事業を行ったほか、地域でワークショップや意見交換などを実施する際、クリエイティブ人材が参加することをアーツカウンシルしずおかが後押しする派遣制度により、実用的な施策検討ができる機会を創出した。

地域とアーティスト等のクリエイティブ人材との出会いによってはじまること

今年度は、ホストと「MAWでの変化」について意見を交わす機会を複数回設けることができた。そこでは、「アーティストも同じ人間である」という当然でありながら意識化しにくい事実に対する感想が多く聞かれた。中でもホスト座談会での「アーティストもすべてをわかっているわけではない、わからないから作品をつくっている」という、あるホストの発言は象徴的だろう。地域とアーティストが同じ「人と人」として、「わからない」を前提にしながら対話できるのがMAWだ。そこでの対話によって、普段は意識していなかった自分の潜在的な思いに触れた人々が、地域の未来に向けたアートプロジェクトの種を育てようとしている。
けれども、その芽が結実するまでには、周囲の理解や期待を促す土壌づくりや、育てるプロセス自体を大事にする長期的な視点など、地域側には柔軟で悠然とした姿勢が求められる。アーツカウンシルしずおかとしてはこうした各地の動きをさらに深掘りし、地域側のモチベーションを後押しできる新しい仕組みづくりに取り組んでいきたいと考えている。

（立石沙織）

クリエイティブ人材の派遣制度

市役所職員、市内施設等事業者、クリエイティブ人材との意見交換の様子　1日目

同左　2日目

派遣したクリエイティブ人材

制度のねらい

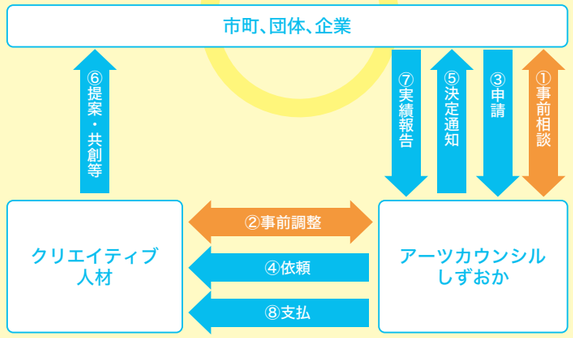
「人と違っているからこそ素晴らしい」というアートの世界は、固定化した価値観を転換する可能性を秘めており、イノベーションを創出する源となる。

異なる領域をつなぎ、思いもよらない発想を生み出すアートの創造性は、複雑化した社会課題に対応する自治体の政策形成や、ビジネス分野における顧客との関係づくり、商品開発、プロジェクト運営、スタッフマネジメントなどにも寄与する。

一方で、アートの力の活用について、組織内でのイメージの共有が困難であり、合意形成が難しく実現に至らないケースや、アーティストとのコミュニケーションが不安で躊躇するケースに対し、アーツカウンシルが調整役を担い、クリエイティブ人材を派遣することにより、様々な現場で、アーティストの視点や発想を活かすなどアートの力を活用した創造的な取組が活性化することを目指す。

制度の概要

対象団体	・静岡県内の市町 ・静岡県内に拠点を置く団体、企業
対象事業	・様々な分野におけるイノベーションを目指す取組 ・住民の参画やコミュニケーションの活性化を目指す取組 ・団体等の職員又は社員等を対象とした研修の検討 ・創造・交流機会の創出を目指す取組 ・アートプロジェクトの担い手を掘り起こす取組 ・計画等の策定及び推進に必要な検討　など
クリエイティブ人材の役割	ア　対象事業に関わる人々との意見交換、提案等 イ　対象事業に関わる人々の創造性を引き出し、コミュニケーションを促進するための共創（ワークショップの講師など）



成果

2021年9月の制度運用開始後、自治体の観光分野と福祉分野からそれぞれ相談があり、観光分野で依頼のあった市にクリエイティブ人材を3人派遣した。観光事業者との意見交換を進める中で、クリエイティブ人材が観光事業者の本音を引き出し、当初、市が想定していた課題とは異なる課題が浮き彫りとなった。

本制度により、アーツカウンシルのマッチング機能が見える化し、「インナーブランディングのため、クリエイティブ人材を紹介してほしい」等の企業からの相談が増えている。

マイクロ・アート・ワーケーションに「旅人」として参加したクリエイティブ人材を本制度で派遣するなど、クリエイティブ人材との連携が広がりつつある。

アーツカウンシルしずおか　アソシエイト

制度のねらい

まちづくりや観光、福祉、教育など、社会の様々な分野と文化芸術との共創を進めるためには、分野によって異なる言語や考え方の違いなどを理解する必要があることから、様々な分野で活躍する人々と気軽に意見交換できるよう「アソシエイト」制度を設けた。

2022年度は、ビジネス分野を中心に起業家等11人をアソシエイトとして委嘱した（任期は2年）。

「企業研修との連携」や「空きスペースの活用」など課題に応じて個別に助言を求めたほか、11月2日に開催した意見交換会では、9名のアソシエイト参加のもと、刺激的な議論が展開された。

議事録
https://artscouncil-shizuoka.jp/sponsored-program/associate-system/

■アーツカウンシルしずおか　アソシエイト（50音順、敬称略）
青木真咲　株式会社Otono　代表取締役社長
荒武優希　合同会社so-an　代表社員
新谷健司　株式会社クラフト・ティー　代表取締役
飯倉清太　特定非営利活動法人NPOサプライズ　代表理事
斉藤雄大　特定非営利活動法人ESUNE　共同代表理事
佐野直哉　上野学園大学　音楽学部音楽学科　准教授
戸田佑也　株式会社あらまほし　代表取締役
土肥潤也　一般社団法人トリナス　代表理事
森田　創　合同会社うさぎ企画　代表社員
山田知弘　有限会社日の出企画　代表取締役
山森達也　株式会社シタテ　代表取締役

所感

複数のアソシエイトから、アートとの垣根を感じるという意見が出されたが、その根底には、アートへの期待感があると感じた。まちづくりやビジネスの現場などでのアートの力の活用が当たり前となっていくためには、マイクロ・アート・ワーケーション等、まずは互いの距離を縮める仕掛けが必要であり、そうした制度の有効性も確認できる意見交換であった。

クリエイティブ人材副業調査

事業のねらい

クリエイティブ人材が日常的に地域住民と交流する環境が生まれることにより、住民の創造性が触発されて新しいスタイルのコミュニティが形づくられ、若者を惹きつける等、地域の魅力向上につながることが期待される。

2021年度のマイクロ・アート・ワーケーションに旅人として参加したクリエイティブ人材へのアンケート調査では、「どのようなメリットがあれば静岡県で活動してみたいか」との設問に対し、クリエイティブ人材の2割強が「副業等の紹介」を挙げていたことから、副業を支援することにより、クリエイティブ人材の移住や関係人口の創出が進む可能性があると考えた。

このため、自治体等が主導する移住促進や関係人口創出施策への反映を目指し、副業に係るクリエイティブ人材と企業双方の意向を調査し、両者のニーズや課題等を把握することとした。

調査の概要

調査内容　❶クリエイティブ人材の副業意向調査
❷県内等に業務拠点を置く企業を中心とした意向調査
❸①②の結果等に基づくマッチング、副業の試行　など

委託期間　2022年6月～2023年3月

委託先　合同会社うさぎ企画

マッチングの事例

静岡東部の総合商社×アーティスト（美術系）のマッチング

ECサイトや社用車に掲載するイメージキャラクターの制作が進行中。総合商社はBtoB企業で、一般消費者の認知度不足を課題としており、イメージキャラクターの存在は認知度向上に有益と判断。社長自身もイラスト描きを趣味とするなどクリエイティブに理解があった。アーティスト側も「時間がかかる絵画制作の合間に、短時間で仕上がる企業ロゴ制作等の発注があれば挑戦したい」という意欲を持っており、今回のマッチングに至った。

地域産業とクリエイティブ人材マッチングモデル事業

事業のねらい

将来の予測が困難な時代を背景に、「アート思考」が注目されるなど、ビジネスの分野においてもクリエイティブ人材の活躍が期待される。

一方で、こうした人材の約３割は東京都に集中している（H27国勢調査）。

このため、企業のイノベーションに寄与するとともに、将来的な移住にもつながるよう、クリエイティブ人材の活動領域の拡大を目指し、同人材の持つ能力をビジネスと紐づけ活用する仕組みを開発・試行するモデル事業を実施した。

事業の概要

地域産業とクリエイティブ人材を紐づけ、ビジネス分野におけるクリエイティブ人材の活動領域の拡大につながる試行的な取組を行う企業と連携し、マッチングモデル事業に取り組んだ。

実 施 期 間 ：2022年6月～2023年3月
連携先企業：有限会社日の出企画
（2022年5月公募、応募3社の中から1社を選定）

成 果

2023年2月27日から6日間、長泉町の下土狩駅前コワーキングスペースで試作品発表展示会を開催。作品づくりの新たな活路を見出したいアーティストと、販路を新規開拓したいデザイナーやものづくり企業が出会い、互いのアイデアと技を組み合わせた “商品”を展示した。会場には「アーティスト共創よろず相談窓口」も設け、地元ものづくり企業への相談会やクリエイティブ人材とのマッチングも進めた。

マッチングの状況

○鉄工所（工業団地内）× 鉄作家 × デザイナー
・アーティストによる嗜好性の高い鉄の道具（コーヒー器具）
○製材所 × 木工作家 × デザイナー
・稼働式カウンター
○キュレーター＆アーティスト× 石工所
・カメラを用いたインテリア

地域づくりフォーラム
「企業のクリエイティビティと地域のイノベーション」

事業のねらい

企業がイノベーションを起こすには、クリエイティビティが不可欠といわれるＶＵＣＡの時代にあって、「地域に目を向け、共創を通じて住民のクリエイティビティを引き出している企業は、地域社会にイノベーションを起こす牽引役である」というコンセプトを提示し、特にビジネス分野とアートとの連携を促進することをねらいフォーラムを開催した。

当日、登壇した３人の経営者からは、数々の印象的な発言とともに、アートの力への期待感が表明された。

実施内容

日　　時：2022年11月２日（水）13：00～15：30
会　　場：グランシップ６階「交流ホール」＋オンライン配信
参加者数：188名（会場参加…72名、オンライン視聴…116名）
総合司会：永楠あゆ美（俳優）

項　目	ゲスト
基調講演（25分） 「地域の価値を高める企業経営」	ACAO　SPA＆RESORT株式会社 中野善壽　代表取締役会長CEO
ゲストトーク①「オリーブ園を核とした地域づくり」（20分）	株式会社CREA　FARM 西村やす子　代表取締役
ゲストトーク②「SWEETS BANKを拠点とした地域活性化」（20分）	有限会社春華堂 間宮純也　常務取締役
トークセッション「クリエイティビティと地域のイノベーション」（60分）	中野氏、西村氏、間宮氏 （モデレーター：ＰＤ鈴木一郎太）

３人の経営者の発言より

- ＰＬ（損益計算書）だけ見ていたのではわからないことをしっかりと感じて、何をすべきかを考えることが必要
- オンリーワンにチャレンジする精神がアート
- 再現性が高い仕事が出来ていれば良かった時代から、新しいものを生み出していく時代となり迷子になっている人が多いが、アート的な思考は、若い世代との相性が良く、興味を持たれている。

アーカイブはYouTubeで公開
https://youtu.be/kgvwZtuYywQ

成 果

事業のねらいどおり、来場者は、企業、金融機関、経済産業部門の行政関係者が中心となった。

企業経営者からアートへの期待感が表明されたことで、フォーラム終了後、企業関係者等からの問合せや相談が増え、新たな連携が生まれている。

アートライティング講座「かきかたきかく」

事業のねらい

アートプロジェクトの企画立案や、展覧会のステートメントや作品のキャプションなど、文化芸術へ関わっていくときに必要とされているのが文章力である。近年、こうした「アートライティング」は注目を集め、首都圏を中心に養成講座が開かれていたり、幾つかの大学では学習の機会を設けていたりする場合もある。しかし、残念ながら静岡県内ではそうした機会は皆無であり、文化芸術の現場では専門となる人材が不足している状況になっている。

そこで、専門的なアプローチ方法を習得し、静岡県内で開催されるアートプロジェクトの鑑賞などを通じて、他者に伝わる文章作成の方法を実践的に学ぶためにアートライティング講座を開催した。受講生が文化芸術に関わる書き手として活躍できる機会を目指し、完成した文章はアーツカウンシルしずおかのWebサイトで公開することで、アートライターとして個々の受講生のデータベース化を行い、県内各地での活動基盤を整えるとともに、複業支援の足掛かりへと繋げていくことを目的とした。

成果

特徴的だったのは、「『良い』だけでなく、どんな点が良いのかを書き表してほしい」「主語が述語と結びついていないから、読者が迷子になる。2つの文に分けることで解決できる」など、講師の添削が文章構造を校正することに徹しており、内容の良し悪しについての言及は一切しなかったこと。たとえば、最初の課題である「人生でいちばんおどろいたこと」では、受講生一人ひとりの専門性や人生経験が反映された文章が仕上がったが、講師の狙いは無味無臭の文章をつくり出すことよりも、文章に各々の人となりを加えて熱を帯びた文章を書くことの大切さを伝えることにあった。受講生が言葉を自分の中でゆっくりと噛み砕いて吟味していくという体験は、個々人の文章力や執筆の癖を振り返る機会にもなり、21名の書き手の活躍を後押しすることに繋がっていった。

実施内容

講師に美術評論家で秋田公立美術大学大学院准教授を務める福住廉さんを招聘し、全2回の講座を開催。年代も職業も多様な21名の参加者が集う中、事前に講師から出された課題は400字以内で「人生でいちばんおどろいたこと」をテーマにした文章と、各々が自由にテーマを設定した文章を執筆するというもの。講師による添削指導や受講生同士の意見交換を経て、一人ひとりが書き直した文章は、アーツカウンシルしずおかのWebサイトで公開した。

【事前説明会（オンライン）】
2022年7月2日（土）14時～15時

【日　時】
〈第1回目〉2022年8月21日（日）14時～16時
〈第2回目〉2022年11月13日（日）14時～16時

【会　場】
グランシップ9階会議室

超老芸術（ちょうろうげいじゅつ）

見原英男さんによる木彫りの鰹や鮪

「かもめ次郎」こと、本多正義さんによるモノマネ芸

山下弘明さんが「松本城」を模して制作した犬小屋

小八重政弘さんが制作した石彫

本田照男さんの制作風景

事業のねらい

我が国は未だ世界有数の長寿国を維持し続けており、2036年には高齢化率は33.3%まで増加し、国民の3人に1人が65歳以上になると見込まれている。一方で、「人生百年時代」とも言われる超高齢化社会においては、介護や医療負担、社会保障制度の問題だけでなく、退職後の長い人生をいかに健康で充実させていくかという「健康寿命の延伸」が問われており、このような長い期間を単に「余生」として過ごすのではなく、「第二の現役期」として生きがいをもって積極的に社会参加をしていくことが求められている。

こうした中で、高齢者による芸術活動が社会参加のひとつとして注目を集めており、近年では、英国において孤立をはじめとした人々の社会課題を解決するための取り組みとして知られる「社会的処方」の一環としても位置付けられている。しかしながら、健康寿命の延伸やサクセスフル・エイジングという言葉が強調されすぎると、かえって高齢者に対するエイジズムが促進され、高齢者が自身をネガティブに捉えてしまうことが強められてしまう恐れが指摘されている。加えて、孤立を解消するために社会参加が奨励される中で、集団に参加することができない、あるいは自ら集団に属さないという選択肢を選んだ高齢者も少なからず存在しており、そのような人たちの中には人知れず創作活動に打ち込んでいる人たちが一定数存在している。

そこで、高齢になってからも独学でユニークな表現活動を続ける人たちを取材し、そうした人たちが生み出す表現を「超老芸術」と名づけ、紹介を続けている。

実施内容

以下の8名を発掘紹介した。
小楠 吉弘　（1938年生まれ、静岡市在住）
小八重 政弘　（1954年生まれ、静岡市在住）
佐藤 良博　（1955年生まれ、熱海市在住）
本多 正義　（1948年生まれ、伊東市在住）
本田 照男　（1946年生まれ、沼津市在住）
増田 喜良　（1952年生まれ、静岡市在住）
見原 英男　（1936年生まれ、焼津市在住）
山下 弘明　（1955年生まれ、浜松市在住）

成果

アーツカウンシルしずおかのWebサイトやウェブ版「美術手帖」で紹介するだけでなく、以下のテレビ番組等でも紹介されたことで、多くの問い合わせや情報提供等をいただいた。

◆超老芸術 驚きの鬼才!爆誕
前編：2022年8月6日（土）23:30～24:00
［NHK総合・全国放送］
後編：2022年8月13日（土）23:30～24:00
［NHK総合・全国放送］
静岡県内だけでなく、熊本や福岡、石川など全国各地の「超老芸術家」の表現を紹介。
◆鬼才爆誕！超老芸術リターンズ
2022年9月16日（金）19:30～19:57
［NHK総合・静岡県域放送］
◆Webサイト「NHKラーニング」
2022年11月7日（月）より「"超"芸術」の枠で動画2本を掲載中
◆イモヅル式に学ぼう　NHKラーニング
2022年11月20日（日）24:00～24:29
［NHK Eテレ・全国放送］
◆展覧会「超老芸術展」
2023年3月12日（日）［グランシップ大ホール］

全国ネットのテレビ番組で特集されたことで、「超老芸術」という言葉の認知度が高まり、2023年5月には「超老芸術」の書籍出版が予定されるなど、近い将来、これまで世間一般が抱いてきた「老い」に対するマイナスイメージが払拭されるひとつの契機となっていく可能性がある。

相談窓口 | Consultation

アートプロジェクトの主催者、アーティストや文化拠点の運営者、舞台関係者、アーティストとのネットワークを構築したい企業、アマチュアとして活動されている方など、県内を中心に文化・芸術を軸として活動を行う方々をサポートする無料相談窓口を開設している。相談員には、アーツカウンシルしずおかのプログラム・ディレクター、コーディネーターをはじめ、士業（弁護士、税理士、中小企業診断士）の方々、文化芸術分野をはじめ、幅広い見識を持つ特別相談員にご協力いただき対応している。

2022年度相談件数

相談内容	件数
活動	59
助成	33
運営	24
企画内容	7
情報提供（照会）	9
マッチング	6
その他	32
合計	170

相談対応者

●プログラム・ディレクター、
　コーディネーター

●弁護士・税理士・中小企業診断士
※本年度提携している方々：
　植松真樹弁護士
　桜田武己税理士
　河原崎紗綾香中小企業診断士

●平野雅彦特別相談員
【平野 雅彦】
元ふじのくに文化情報センター長。国立大学法人静岡大学人文社会科学部客員教授。静岡県広報業務アドバイザー。各種コンクール審査員、芸術祭ディレクター、執筆、パネルディスカッションのコーディネーター等多数。

相談者の声

相談内容
地域を元気にしたいという想いで、民家や空き店舗に絵画、陶器などの作品を展示するアートイベントを毎年開催している。今年も開催予定だが、作品の展示などで協力してくれるアーティストやクリエイターがいれば紹介してほしい。（アートプロジェクト主催者）

相談員からの助言
アーツカウンシルしずおかでは、県内を中心に活動するアーティストやクリエイター・文化団体等をまとめた「クリエイティブデータベース」をホームページ上で公開している。今回はその中から、企画に合いそうな方をリストアップしお伝えする。

相談者の声
今年もイベントを開催し、クリエイティブデータベースの中から1名の絵画アーティストが参加してくれた。多くの方にご来場いただき、また、新たなアーティストとの出会いがあり、とてもよいイベントとなった。ご紹介いただき感謝している。

相談内容
障害者アートの展示会を企画する目的で、企業が集まり実行委員会を組織、ミーティングを重ねているが、具体的なノウハウに乏しいためアドバイスがほしい。（企業関係者）

相談員からの助言
運営の仕方やどのような発信を行うかなどについて、全国で行われている他の障害者アートの実例を紹介する。
また、専門スタッフの中に、障害者の芸術活動を支援したことのある者がいるので、その者に実行委員会向けに講演を行うことも可能である。

相談者の声
貴重なアドバイスから、実際に講演まで行っていただき大変ありがたかったです。今回の企画について、自分たちで価値は見出していたものの、足りていない要素があるだろうと不安を感じておりましたが、ご相談したことで安心することができました。今後もアドバイスをいただけると嬉しいです。

相談内容
任意団体として活動しており、音楽と地域社会に関わる活動をしているが、運営がとても大変な状況である。継続的に活動を行うためにどのような方法が考えられるのか、中小企業診断士からアドバイスをもらいたい。（音楽関係者）

相談員からの助言
収益の仕組みを考えていく必要があるが、全国の文化芸術団体を見ても、会費や入場料収入が中心で、その他は補助金や寄付金収入を得ているところが多い。例えば、任意団体から法人化を目指し、仲間を増やすことで理解者を得て、補助金に挑戦したり寄付金収入を得たりする、ということは一つの方法である。
また、クラウドファンディングを行い、ウェブサイトやSNS等で情報を発信し、自分たちの活動理念に共感してくれる方から資金を募ることもできるのではないだろうか。

相談者の声
活動について具体的なアドバイスを頂けたことで希望が持てました。現在、ウェブサイトの制作を進めつつ、補助金・助成金申請の申請も検討しています。

広報資料 | Promotion

2022年11月

●アーツカウンシルしずおかウェブサイト内で加藤種男アーツカウンシル長によるコラム【静岡県ゆかりの祝祭芸術】連載開始
https://artscouncil-shizuoka.jp/shukusaigeijutsu/
県内各地の名所旧跡、歴史的建造物、ゆかりの人物、アートプロジェクトや実施団体などを独自の視点で切り取って紹介。
週1回更新。

2022年6月

●「2022年度文化芸術による地域振興プログラム」のご紹介
　リーフレット（A4判カラー・6ページ）

2022年10月

●「2023年度文化芸術による地域振興プログラム」助成事業募集案内 フライヤー（A4判カラー両面）

●地域づくりフォーラム「クリエイティビティと地域のイノベーション」フライヤー（A4判カラー両面）

2023年1月

●「おもしろい人に会いたい!!2023ーしずおかアートプロジェクト見本市ー」フライヤー概要版（A4判カラー両面）

2023年2月

●「おもしろい人に会いたい!!2023ーしずおかアートプロジェクト見本市ー」フライヤー詳細版（A3判2ツ折カラー両面）

2022
アーツカウンシルしずおか
アニュアルレポート

ARTS COUNCIL SHIZUOOKA
ANNUAL REPORT 2022

2023年4月発行

発行　アーツカウンシルしずおか（公益財団法人静岡県文化財団）
〒422-8019 静岡県静岡市駿河区東静岡2-3-1 グランシップ1F
TEL (054)204-0059　FAX (054)288-8180
Mail | info@artscouncil-shizuoka.jp
Web | https://artscouncil-shizuoka.jp

デザイン　株式会社共立アイコム